

陳望道『修辞学発凡・第七編』訳注 積極修辞三（上）

丙類 言葉を利用した修辞法
付録 霍四通「現代における析字などの『言葉を利用した修辞法』」五種の研究の進展について

『修辞学発凡』訳注班^{*1}

代表 甲 斐 勝 二（人文学部教授）
間 ふさ子（人文学部教授）
霍 四 通（復旦大学中文系副教授）
羽 田 ジェシカ（福岡大学非常勤講師）
張 璐（福岡大学非常勤講師）
王 毓 雯（言語教育研究センター外国語講師）

翻訳に当たって

以前より研究所紀要に掲載を続けている陳望道『修辞学発凡』の翻訳の第七編の前半部分を掲載する。今回は言葉の利用を主とした修辞法である。翻訳の参加者は、本学非常勤講師の張璐、羽田ジェシカ、講師の王毓雯、人文学部教授の間ふさ子、同じく甲斐勝二である。復旦大学中文系副教授の霍四通先生には、各修辞法の解説をお願いしている。

この『修辞学発凡』は、修辞学としてはすでに古いものなのだが、中国における修辞学研究の一つの成果であると共に、民国から人民共和国へと移り変わる当時を生きた中国の知識人陳望道の所謂中国語文への認識が示されていて、非常におもしろい。訳出する所以である。文中に引用される様々な例文は、従来通り日本語に翻訳があれば概ねその翻訳を使わせていただいたが、修辞法の説明にふさわしいように語句をいささか変えたり体例を整えたりしたものもある。ご了承いただきたい。適切な翻訳がなかったりあっても手元では見られなかった場合は、私たちの方で訳している。『修辞学発凡』には、古今の各種各様の文体が出てくるので、訳者の力量不足により誤訳やその修辞法を強調するがあまり間違いも多いだろうとの心配は毎回同様である。修辞の工夫を示すために文中に（ ）で意味を補ったところも多々あって、読みにくいかも知れないが、筆者の陳望道がその文を引用し

た目的はなんとか示されるようにして、その主張がうまく伝わるように努めたつもりである。

今回も復旦大学で修辞学を研究する霍四通先生から一文を寄せていただいた。陳望道の修辞学研究は既に半世紀以上も前の時代にできあがったもので、現在では当然研究の視点や解釈および扱い方に变化や進展があるはずである。霍先生にはそれがうかがえる文章をお願いした。今回は陳望道の資料収集の熱心さを示す話も引用されている。篇末に訳出しておいたので、興味のある方は参考にさせていただきたい。このようなやり方でも、一つの国際共同研究として続けばと願っている。

ご指正をお待ちします。

陳望道『修辞学発凡』第七篇 積極修辞三（上）

丙類 言葉を利用した修辞法

一 析字（文字を分解する）

漢字には形（字形）・音（発音）・義（意味内容）の三要素がある。用いる漢字を形・音・義の三要素に分けて、別の漢字の一部分と合わせ繋げて、それによってできる漢字をもとの漢字代わりに使ったりその意味に変えて利用すること、これを析字法という。顧炎武

*1 原稿の準備やそのまとめ役は甲斐が引き受けている。原稿は全員で見たが、問題があればとりまとめ役の甲斐が責任を負う。

『日知録』*2 卷二十七に言う。

李白の詩に「古朗月行」がある。また「今人は古時の月を見ず」(「把酒問月」ともうたっている。王伯厚は『抱朴子』を引いて「世俗の人士はしばしば、今の太陽は古の太陽の暑さほどではない、とか、今の月は古の月ほど明るくはないという」と述べている(『困学紀聞』卷十八、『抱朴子』外篇卷三尚博篇)。だとすればその言葉の通りで理解できよう。しかし、「狂風は古月に吹き、窃かに章華台を弄す」(「司馬將軍歌」と述べたり、また「海は動き山は傾き古月に摧ける」(「永王東巡歌」とも唱われている。そこにいう「古月」とは明らかに「胡」の文字のことで、無理に解釈してはならない。……析字の形式は、古いや予言の讖文を書くときに使うばかりで、詩の中に使うことがあるだろうかという人もいるかも知れないが、「藁砧は今何にか在る、山上に復た山有り」と言うように、古詩の中にすでにちゃんとある。

顧炎武が引用して詩の中にも析字法があると言ったその古詩「藁砧は今何にか在る、山上に復た山有り、何ぞ大刀の頭に当たらん、破鏡天に飛上す*3」について考えてみよう。一見しただけでは理解できないので、解説が必要である。宋の王観国は『学林新編』卷八でこれを説明して、「藁砧というものは「鉄」である、「藁砧は今何にか在る」とは夫がどこにいるかを尋ねているのだ。「山上に復た山有り」とは、「出」のことで、夫が既に出ていることを言うのである。大刀の頭とは、「鑲」である、何ぞ大刀の頭に当たらん、とはいつ帰ってくるのかということだ。破鏡とは、月を半分に分割ることで、破鏡天に飛上す、とは、月の半ばには帰ってきてほしいということだ」と言っている。この解説によれば、まず「藁砧の語は2段階の曲折がある。(1) 初めに「鉄」(お)の意味に解釈し、(2) それから「鉄」と同じ音の「夫」の意味に解釈するのである。「山上にまた山有り」は「出」の字を別の形態でのべたもの。「大刀の頭」も2段階の曲折があり、(1) 最初に「鑲(わ)」の意味に解釈し、(2) 次に「鑲」の音から同音の「還」へと考える。「破鏡」は月が半分になったものと解釈するのである。加えて引用されている李白詩の後の二例でも、顧炎武の解釈によると、「胡」の字形を変えて「古月」の2字にしたものになるのである。析字を使う修辞の基本方法は併せて3

種類ある。(1) 形態を変える(化形)、(2) 同音利用(諧音)、(3) 拡大解釈(衍義)だ。そのほかのものは、この3種の基本方法を(或いは別の修辞法を利用し)組み合わせることでできるものである。今、以下にそれぞれ説明しよう。

1. 形態を変えて行う析字法(化形)

字形を変化させる析字法は概ね3種に分けられる。(甲)字形の離合によるもので、離合と呼ぼう。(乙)字形の増減によるもので、増減と呼ぼう。(丙)字形を借りるばかりのもので、借形と呼ぼう。この3種の中では、離合の形式が最もよく見られる。

(甲) 離合

(一) 馮玉祥はいつも言う、「私は私の丘八画を描き、私の丘八詩を書く」と(薛篤弼よりの手紙)*4

(二) 張俊民は言う、「王さん、こいつはあなたのやり方にかぎる。うまくいったらかならずや言・身・寸といきますよ。」王胡子は「私はもしあなたがお礼を…」(『儒林外史』第三十二回)*5

このような字形を離合させる措辞は、一文字の字形を分解して用いるもので、例えば「兵」を分解すれば「丘」と「八」の二字になるので、「丘」と「八」の二字を用いて「兵」一字の代わりとし、「謝」の字は「言身寸」の三字に分けられるので、「言身寸」の三字によって「謝」の一字の代わりにしたのである。

旧詩体中の離合体詩では、このやり方を用いたものもある。例えば『紅樓夢』の中の以下のような例だ。

(三) 凡鳥は末世に生まれ来たり みなこの生の才を愛慕するを知るも 一従、二令三人木 哭きて金陵に向こう事更に哀し(『紅樓夢』第五回)*6。

「凡鳥」は「鳳」を分けたもので、暗に王熙鳳*7を指す。周春の『閩紅樓夢隨筆』は、「詩の中の「一従二令三人木」の一句について、「二令」は「冷」である、「人木」は「休」である」と述べており、旦那の賈璉の王熙鳳への態度が、従順から冷淡になって、休みを出して(離縁して)捨てる所までを暗示するものとなっている。

さらに奇怪な人物として知られる孔融の「郡姓名字詩」などは、宋の葉夢得の説明に依れば、「魯国孔融文學」と言う6文字の離合でできているという。

*2 顧炎武『日知録』：明末清初の考証学者顧炎武(1613-1682)の考証を集めたもの。

*3 藁砧の詩：梁徐陵『玉台新詠』(卷十)に所収。

*4 馮玉祥は民国時代の軍閥、薛篤弼は人民共和成立以後全国協商委員を務めた人物。

*5 『儒林外史』：訳文は平凡社中国古典文学体系43を参照。以下同じ。

*6 『紅樓夢』：訳文は岩波文庫『紅樓夢』(松枝茂夫訳)を参照。以下同じ。

*7 王熙鳳：『紅樓夢』に出てくる女性の一人、紅樓夢の舞台となる豪邸の榮国邸を切り回すやり手の夫人。

（四）漁夫屈節、水潜匿方

漁夫節を屈し 水に潜りて方を匿す

— 漁から水を取り魚の字を離す

輿時進止、出寺弛張

時と進止し、寺を出でて弛張す

— 時から寺を取り日の字を離す

魚と日で合わせて「魯」の字になる

呂公磯釣、闔口涓旁

呂公磯に釣り、口を闔す涓の旁ら

— 呂から口を取り口の字を離す

九域有聖、無土不王

九域に聖あり、土の王たらざるものなし

— 域から土を取り或の字を離す

口と或で合わせて「國」の字になる

好是正直、女固子臧

よきはこれ正直、女は固より子を蔵す

— 好から女を取り子の字を離す

海外有載、隼逝鷹揚

海外に載あり、隼は逝き鷹は揚がる

— 載から隼を取りしの子の字を離す

子として合わせて「孔」の字になる

六翮将奮、羽儀未彰

六翮まさに奮わんとするも 羽儀いまだ彰かならず

— 翮から羽を取り鬲の字を離す

龍蛇之蟄、俾它可忘

龍蛇の蟄するや、它をして忘れしむるべし

— 蛇から它を取り虫の字を離す

鬲と虫で合わせて「融」の字になる

玫瑰隱曜、美玉韜光

玫瑰は曜を隠し、美玉は光りを韜す

— 玫から玉を取り文の字を離す

無名無譽、放言深藏

名なく譽なく、言を放ちて深く蔵す

— 譽から言を取り與の字を離す

按轡安行、誰謂路長

轡を按じて安にか行かん、誰ぞ道の長きを謂わん

— 按から安を取り扌（手）の字を離す

與と手で合わせて「舉」の字になる

（『石林詩話』*8 卷中、及び『陔餘叢考』*9 卷二十二に引用のものを参考使用）

他に酒令、童謡の類いにも、この方式を用いることがある。酒令の例では、

（五）〔令〕 鉏麈は槐に触し、死して木辺の鬼となる。

〔答〕 豫讓は炭を呑み、終に山下の灰となれり*10。

（唐人酒令の一つ。『苕溪漁隱叢話』*11 前集卷二十一に引用）

童謡では、

（六）千里草、何ぞ青々たる。十日のト、生を得ず（『後漢書』五行志） 范曄の注によれば千里草は「董」を、十日トは「卓」となる）*12。

このほかに、歴史書に載せるようなもの、劉を卯金刀（『後漢書』光武紀注）といい、許を言午といい（『三国志』魏文帝紀注）、王を一士といい、張を弓長といい（『宋書』王景文伝）といい、裴を非衣という（『唐書』裴度伝）なども、このやり方である。

（乙）増減

（七）紫芝が「既に皆さん飲み終わりましたので、笑い話をしてください。もし聞いたことのあるようなものだったら、罰杯を飲ませます。」という、玉児は言った。「では私の姓にまつわる話をしましょう。王という姓の一家があり、八人の兄弟が、ある方において名前をつけてもらうことにし、さらに綽名もつけてもらうことにしました。その上その名前は本姓に形が沿うようにするように頼んだのです。その日、その人は彼らに次のように名付けました。一番目、名を王主、綽名は無理に頭を出したが王大としました。二番目、名を王玉、綽名を酒壺偷みの王二としました。三番目、名を王三、綽名は良心のない王三としました。四番目、名を王丰とし、綽名を鉄砲担ぎの王四としました。五番目は王五とし、綽名は無理に曲がりたがる王五としました。六番目、王壬とし、綽名を首かしげの王六としました。七番目、名を王毛とし、綽名を尻尾を曲げた王七としました。八番目、名を王全としましたが、この全の字は入部に入る漢字で、人部に入る字ではないので、綽名は人でなしの王八となりました。」（『鏡花縁』*13 第八十六回）

（八）昨日、去年執筆した文章の編修を終わり、新聞に発表した短い評論以外のものを取って『且介亭

*8 『石林詩話』：宋の葉夢得の撰。

*9 『陔餘叢考』：清の趙翼の撰。

*10 鉏麈：春秋時代の人、臣下としての矛盾に悩み槐に頭を打ち付けて自殺した人物。豫讓：戦国時代の人、仇を伐つために炭を呑んで声を変えた人物。

*11 『苕溪漁隱叢話』：南宋の胡仔の編纂。

*12 これによってできる「董卓」の語は後漢末の人物を指す。

*13 『鏡花縁』：清の章回小説、李汝珍の作。

雜文』と名づけた。(魯迅『且介亭雜文二集』^{*14}序言。且介亭とは、半租界の中の亭—東屋のこと「且介」とは、「租界」の二つ文字からそれぞれ半分づつ取ったもの)。

(九) 徐之才は、聡明で弁が立ち知識が豊富であった。頭の回転が人の倍は速く、冗談が大好きで、公私の場で会話がはずむところ、しばしば人をからかった。……王昕の姓をからかって「言があれば証^{*15}、犬を近づければ狂、首と足を加えれば馬、角と尻尾をつければ羊になる。」と言ったので、盧元明はそこで之才をからかって「あなたの姓となると、未だ人には入らず、名は文字の間違いで、‘之’は‘乏’とすべきであろう。」と言った。するとたちまち「あなたの姓は、亡命すれば虐、墳墓にあれば虚(虚)、男を生めば虜となり、馬を飼っても驢馬ですな。」と答えたのだった。(『北齊書』徐之才伝)

以上に挙げた例は、みな一字の字形をいささか増したり減して用いるものだ。例えば王「主」、王「玉」、王「全」は、形を付け加えたものだ。王「三」、「且介」は形を減らしたもの。「亡命すれば虐、墳墓にあれば虚(虚)」は、増減を共に用いたものである。

(丙) 借形(字形の借用)

(十) 蘇州城には南園と北園の二ヶ所あり、菜の花が黄色に満開するとき見物に行くのだが、惜しいのはそこにはちょっといっぱいやれる酒屋がないことだ。折詰めを持って出かけたとしても、冷酒で遊山というのではまことにもって興ざめである。で、その付近に飲み屋をさがして飲もうとか、或いは花見の帰りに飲もうという案も出たが、やはりなんといっても花を見ながら熱燗でやる楽しみには及ぶべくもない。さてどうしたものかと思案投げ首の際、芸が笑いながら、明日みなさんで割前金さえお出しになれば、わたくしが自分で炉火をかついで来て上げましょうという。一同は笑って、結構ですなといった。一同が帰ってから、君はほんとに自分で行くつもりかねと尋ねると、いいえそうじゃないの。市の中をワントン売りが触れ歩いているのをよく見かけますが、あの連中の担いでいる荷には鍋や竈はもちろんそのほか必要な物は何でも揃っているよう

です、あれを雇っておいでになったら如何でしょう。料理のほうはわたくしがちゃんとこさえておきますから、彼処においでなさってからちょっと鍋で暖めていただければよろしいし、お茶もお酒もそれでわけなくできましたよという。酒とお茶の方はそれで間に合うだろうが、お茶をわかつ道具はどうするのときくと、素焼きの瓶を持って行って、瓶の柄に鉄叉を通して、その鍋をはずして行竈の上につるし、薪の火でお茶をわかせば、それで間に合うわけですね……。翌日になって花見に行く友人たちがやって来たので、私がお茶の話をする、一同はみなその妙案に感服した。食事をすましてから、席や敷物をたすさえて出かけた。南園について、柳の木陰の屈々な場所を選んで車座になり、まず茶を沸かしてから、酒肴を暖めた。ちょうどこの日はうらうらと晴れわたった日で風がなく、見わたすかぎり黄金色をなした田園の中を青い衫や紅い袖の男女が右往左往し、蝶や蜂はさかんに飛び交っていて、飲まないうちからもう酔ったような気分になってしまうのであった。やがて酒も肴もできたので、車座になって大いに飲み且つ食った。ワントン売りはなかなか面白い気前の男だったので、むりに坐らせていっしょに飲んだ。それを見た花見客は、一人としてこのめずらしい趣向をうらやましがらぬものはなかった。やがて杯盤狼藉、各各すっきり陶然とした気持ちで、思い思いに坐ったり寝そべったりして、歌うものもあれば嘯くものもある。夕日がやがて没しようとするころ、私が粥を欲しがるとワントン売りはさっそく米を買って来て煮てくれたので、満腹して帰った。芸がたずねていう「今日の行楽は楽しかりしや」と問うと、皆「夫人の力添えがあったればこそ」そういって大笑いをして別れたことであつた(『浮生六記』閑情記趣)^{*16}。

ここに挙げた例の中で、「今日の行楽は楽しかりしや」と「夫人の力添えがあればこそ」の二句は、既にある決まり文句を用いたもので、前者は蘇軾の「後赤壁賦」から、後者は『左伝』僖公三十年の晋文公の言葉から出ている^{*17}。ただし、晋文公が使った「夫人」は秦穆公を指す。「夫」の音は「扶」^{*18}、『左伝』の「夫人」とは、「その人」といった意味だが、ここではそれを借りて奥様の

^{*14}『且介亭雜文二集』：訳文は学習研究社刊『魯迅全集』8を参照。

^{*15}証：証の隷書の省略体。

^{*16}『浮生六記』：清の人、沈復の回想録。訳文は岩波文庫(佐藤春夫・松枝茂夫訳)を参照。

^{*17}前者蘇軾「後赤壁賦」、後者『左伝』僖公三十年：宋の蘇軾の「後赤壁賦」には赤壁から帰宅した蘇軾の夢に道士が出てきて「赤壁の遊びは楽しかりや」と尋ねる箇所があり、『左伝』には、晋の子犯が秦軍を攻撃しようとしたとき、晋侯が「それはいけな、夫人(秦伯)の尽力がなかったら、今日はない」と答えた部分(『左伝』の訳は岩波文庫『春秋左氏伝』を参照)を指す。

^{*18}「夫」の音は「扶」：「夫」をこの音で読むとき、指示代名詞の意味を持ち本文のような解釈になる。陳望道の指摘は『左伝』注疏の理解に従うもの。

意味の夫人とし、それによって引用を使って尋ねた芸夫人に応答している。借用の理由は、「その人」の意味の夫人の文字が奥様の意味の夫人の「夫」の字と字形が同じであるばかりだ。したがって、それは借形応用法の一つとなる。

（十一）王熙鳳は笑って、「ばあやさん、ご安心なさいよ。そのふたりの乳兄弟はみんなわたしにあずけておきなさいな。あんたが赤ん坊の時分からおっぱいをやって育てあげなすった息子のことでも、そのご気性はなに一つご存じないわけではないわね。どうでもいいような外の人のからだには皮や肉までつけてやるような大世話を焼きながら、自分の乳兄弟はまるでほったらかしてるんですものね。おふたりさんともいずれ人にひけを取るようなかたではないのにさ。あなたがそのおふたりに目を掛けてお世話してあげになったからって、だれがひとことでも文句をつけましょう。それをみすみす他人にばかりうまい汁をすわせてやるなんて、そんな手はないわね。一あら、今のは私の失言でした、私どもでは‘外人’だと思っているのに、あなたはまるで‘内人’^{ないにん}同様に考えていらっしゃるんだものね。」そういったので部屋中の人はずっと笑った。趙ばあやはきやっきやいて笑いながら、また念仏をとなくて、「ほうら、家のなかにお天道さまがお出ましになりました。でも内人だからとか外人だからとかいう、そんなわけのわからぬことはけしてうちのとのさまはなさいませまい。ただお人がよくて慈悲深くていらっしゃるため、人さまからちよいとたのまれるとことわりきれなさらぬのでございましょう。」熙鳳は笑って、「ほんとうにそうですね。うちの人はね、内人のある人に限ってへんにやさしくなるのよ。そのくせあなたやあたしなんかに対してはきつく当たりなざるのですのよ。」趙ばあやは、「若奥さまの、ほんとうに情理のとおった義理堅いお言葉を伺って、わたしすっかり嬉しくなりました。ではもう一杯だけ結構なお酒を頂戴いたします。これからは、若奥さまのさしがねで万事なさってくださいませうから、わたしにもくよくよすることはなくなりました。」（『紅樓夢』第十六回）

ここに言う「内人」とは旧時は男性が自分の妻を呼ぶ呼称だった。王熙鳳はここで、「自分の身内」の意味で使い、「外人（他人）」と字面上で対応させているので、笑いを呼ぶのだ。これもまた形を借りた応用法である。以下の二つの例は、やや異なるが、やはり同類に属するものである。

（十二）陸通明は、代々洞庭に住んでいた。呉某が山に逗留したので、往来して親しんだ。ある日、陸の奥さんが出産するというので、呉は訊ねた、「男子は生まれましたか。」陸は言う、「昨晚娘が生まれました、既に溺愛しております。」呉はその遠回しの表現をからかって、「先生は極めて聡明ですが、この点ではまだまだですな。」という。陸が不思議がると、呉は「溺愛するものは聡明さを欠くと言う言葉があるでしょう。」といった。（褚人獲『堅瓠四集』三）^{*19}

（十三）ある人が虞永興の手写『尚書』を典し（質に入れ）て金を借りた。尚書の李選が「経書はどれを典（範）とするべきだろうか」というと、その人は言う「もうすでに堯も典し舜も典しました」（朱揆『諧噓録』）^{*20}

2. 同音を利用する析字（諧音）

字音を合成する析字もまた3種類に分けられる。（甲）は単純な諧音で借音と呼ぶ。（乙）は反切に用いる二つの漢字音を利用したもので、切脚とよぶ。（丙）は反切に用いられる漢字を正逆両方から利用するもので、双反と呼ぶ。3種のうちでは、やはり借音が最も一般的である。

（甲）借音（字音の借用）

（十四）（門番は）そう言いながら、財布の中から一枚の「護官符」の写しを出して、雨村にわたした。それはみな当地方の豪族や高官の家についての俗諺や言い伝えであった。

賈は假ならず、白玉もて堂を^{つぐ}為り金もて馬を作る
阿房宮は三百里でも、金陵の史の一家をすまわ
せきれぬ

東海にもなき白玉の床ありて、龍王も借金を申し
込む金陵の王

豊作にこの大雪、真珠も土くれの如く鉄同然……
（雨村が）この門番にわけを尋ねると、その門番は言った、「この四軒はみな姻戚関係でつながっておりまして、中の一軒が落ち目になれば、四軒全部落ち目になり、一軒が羽振りがよくなれば、ほかの三軒も全部羽振りがよくなるという工合になっています。さっきの殺人事件で告訴されている薛家と申しますのは、つまり‘豊年の大雪’とある‘薛’家のことなんでございます……」（『紅樓夢』第四回）

ここでは「雪」を借りて同音の「薛」を示し、「賈・史・王・薛」の姓の四大封建家族の堂々たる威風を示している。

*19 褚人獲『堅瓠四集』三：褚人獲は清の人、『堅瓠集』は文言小説集。各種合わせて十五集までである。

*20 朱揆『諧噓録』：唐代の笑話書。舜典・堯典は当時経典として尊ばれた『尚書』の中の篇名。

(十五) 探春は笑って言った、「実はあたしたち、このあいだから詩社を持っておりますでしょ。ところがそれが最初から集まりが悪いんですよ。みなさん気の弱い人ばかりだものですから、すぐに足並みが乱れてしまって。そこであたし考えましたの、ここは‘監社御史’になっていただいて冷酷無比にビシビシ取り締まっていただかなくっちゃいけないって……」王熙鳳は笑って言う、「でもあたしは、そんな‘湿’めったの‘乾’いたのって、作れはしないじゃないの、あたしを呼んでご馳走してくださいというならできますけれど。」(『紅樓夢』第四十五回)

ここでは「詩」と「湿」が同じ音^{*21}なので、「詩」から「湿」に変え、会話に面白さを増している。

(十六) 季葦蕭は笑いながら、「あなたがた、また塩馬鹿のお話でしたか。私、最近聞いたんですが、揚州では‘六精’だそうですよ！」すると辛東之が、「‘五精’だけでしょう。‘六精’とはおかしい。」季葦蕭が言う、「その六精というのが大変なんで！まあお聞きください。轎の中に坐っているのが‘債の精’、轎を牽いているのが‘牛の精’、轎にお供しているのが‘屁の精’、門に番しているのが‘うそつきの精’、家の中に隠れているのが‘妖の精’、これが五精ですが、最近に現れましたのが、この塩商たちの頭にのっかっている方巾、ど真ん中は水晶の結びひもと決まっているんですがね、これを加えて‘六精’です。」そういうと、みなはいっせいに笑った。(『儒林外史』第二十八回)

ここでは、「精」と「晶」の音が同じなので、「晶」も「精」と見なして、もとの「五精」に合わせて、「六精」と呼んだのである。

(十七) 高祖が東垣からの帰途、趙を通過した。そこで貫高らは人を柏人にやり、壁の間にかくれて待ち伏せさせた(これを殺そうとした)。高祖が通過してここに宿ろうとしたが、ふと胸騒ぎがして尋ねた。「この県の名前はなんというのか。」「柏人と申します。」一柏人とは人に迫ることだ—泊まらずに通るすぎた。(『史記』張耳陳餘列伝)^{*22}

(十八) これは南京の風俗なのだが、花嫁はかたづいて、三日目に、厨房にはいって料理一品を作り、

将来の繁栄を祈る。その料理は魚と決まっていて、「富貴余り有り」という意味なのだ。(『儒林外史』第二十七回)

これは諧音による析字占いの応用例である^{*23}。漢字の字形を変えて占う析字占いの応用例(つまり所謂「測字」)同様に、その来源は共に古い。

旧詩の中にみえる対偶方式の一つ、詩話の中ではこれを「借対」(巖羽『滄浪詩話』^{*24})或いは「假対」(胡仔『苕溪漁隱叢話』に引用)も、またこの方法である。以下に挙げる例がそれだ。

(十九) 庖丁人は鶏黍をととのえ、幼子は楊梅を摘む。(唐孟浩然「裴司士見訪」。楊を借りて同音の羊とし、同じく動物の鶏と対にする。)

(二十) 談笑には鴻儒あり、往来には白丁なし。(唐劉禹錫「陋室銘」。鴻を借りて同音の紅とし、同じく色に属す白と対にする。)

(二十一) 身を寄せてしばし滄州に近きを喜ぶも、影を顧みれば白髪をいかんせん。(劉長卿「江州重別薛六」。滄を借りて同音の蒼とし、白の対とする。)

以下の二つの例は、音を借りながら、誰もが知る言葉を利用して笑い話とするもので、音を借りる所はやはりこの方法に入れることができる。

(二十二) 隋侯白が州の秀才に挙げられ、都にやってくる、辯の機敏さに並ぶ者はいなかった。曾て僕射越国公の楊素と馬を並べて話をしたことがある。道ばたに枯れ果てた槐樹の木があったので、楊素が、「侯秀才の弁才は拔群ですが、この木を生き返らせることができますか」と聞くと、「できます」と答える。楊素が「どんな方法で生き返らせるのでしょうか」と聞くと、「槐樹の子(種子)を取って槐樹の枝にかけておけば、それで生き返るでしょう」と答える。素が「どういうわけで生き返るのでしょうか」と尋ねると、答えて「『論語』に言うではありませんか、子在れば、回(槐に同音)は何ぞ敢えて死なんやと。」と言った。楊素は大いに笑った。(『太平広記』二百四十八引く『啓顔録』)^{*25}

(二十三) 唐咸通年間、俳優の李可及はその滑稽諧謔の演技で他にぬきんでており、立派な話は無理だが、巧みな智恵と反応の素早さは、珍重された。曾ておめでたい席に参加した折、僧侶と道士の講話が

^{*21} 「詩」と「湿」が同じ音：日本漢字音では2つの漢字は音が異なるが、『紅樓夢』が書かれたころの清代北京では既に同音となっていた。以下同様。

^{*22} 『史記』張耳陳餘列伝：『史記』は漢の司馬遷の著。訳文は平凡社古典文学全集5を参照。

^{*23} 引用文中の柏を当時同音であった迫に読み替え、魚を同音の余に読み替えたもの。

^{*24} 巖羽『滄浪詩話』：巖羽は南宋の人、『滄浪詩話』は巖羽の詩論集。

^{*25} 『啓顔録』：文言笑話集。隋侯白の作とされるが不明、宋代には成立していたらしい。引用の『論語』は先進篇の言葉。賈は『論語』では「莞る」の意味で用いる。

終わり、次は俳優の演技となった。可及はゆったりとした服と広い帯の儒学者の格好をして、裾を挙げて恭しく登壇し、儒・仏・道教の評価をするという。そこにいた者が、「広く三経に通じているとすれば、釈迦如来とは一体何者か。」と尋ねた。こたえて言うには、「婦人です。」問うた者はびっくりして、「何故だ。」と聞く。『『金剛経』に‘敷（夫に同音）を座せしめて而（兒に同音）を座す’とあります。もし婦人でなければ、なぜ夫を座らせそれから子供を座らせましょうや。」お上は口もとをほころばせた。また問うて言う「太上老君（老子）とは一体何者か。」こたえて言うには「これもまた婦人です。」問う者はますます解せない。そこで『『道德経』に‘私に大きな悩みがある、それは私が肉体を持つからだ、私が肉体を持たねば、なんの悩みがあるだろうか’とありますが、もし婦人でなければ、どうして妊娠に悩むでしょうか。」と言った。お上は大いに喜んだ。また、「文宣王（孔子）は何者だろうか。」との問いがあった。「婦人です。」という。問うた者が「どうして分かるのか。」という。『『論語』に、‘うらんかな、うらんかな、私は買（もら）い手（買は嫁に同音、嫁ぎ先）を待っているのだ’とあります。婦人でなければ、嫁ぐのをどうして待ちましょうか。」お上は大喜びで、多くの恩賞を与えたのだった。（『太平広記』二百五十二引く『北夢瑣言』）^{*26}

（乙）切脚（発音の分解と合成）

この方法の言葉は以前は「切脚語」（洪邁『容齋三筆』）^{*27}或いは「切脚字」（俞文豹『唾玉集』）^{*28}と呼ばれ、かつて流行したこともあり、今でもまだその名残はある、例えば孔（穴）のことを「窟窿」^{*29}と呼ぶのがそれである。『容齋三筆』（卷十六）に言う：

人々の言葉に切脚と呼ぶものがあるが、これは書籍の中でも時々見られるものである。例えば、蓬を勃籠といい、槃を勃闌といい、鐸を突落といい、叵を不可といい、団を突突といい、鉦を丁寧といい、頂を滴顛といい、角を屹落といい、蒲を勃盧といい、精を即零といい、螳を突郎といい、諸を之乎といい、旁を歩廊といい、茨を蒺藜といい、圈を屈攀といい、

錮を骨露といい、窠を窟駝というのがそれである。

以下の二つの例の類がこの修辭法の使い方である。

（二十四）伯棼が王を目指して射ると、車の正面から王の前に置かれた太鼓の脚にまで射通し、その台の下につけた丁寧に突きささった（『左伝』宣公四年、杜預注：丁寧、鉦なり）^{*30}。

（二十五）腰かけている客が莫塵もなく寒いのではと心配し、私に新しい蒲の穂を送り座布突突（団）に入れるという（王廷珪「寧公端恵蒲団」）^{*31}

さらに以下の例もこの類いである。

（二十六）多九公は言う、「……才女が先ほど学士大夫から反切まで論じたおりに、目を見張って言葉もない、と言うのに、ましてや我々のごときその上っ面を知るばかりのものは、でたらめを話して、皆さんに笑われる度胸はありません。」紫の衣の娘がそれを聞くと、赤い服の女性を見てそっと笑い、「話の筋から言うならば、‘呉郡大老倚閭満盈麼’みたいね。赤い服の少女はうなづいてくすりと笑った。唐敖はそれを聞くと、ちっとも分からなかった。（『鏡花縁』第十七回）

ここに「呉郡（問）大老（道）倚閭（於）満盈（盲）麼」と言ったのは、つまり「問道於盲（盲人に道を問う）」を反切を使つてのべたものだ^{*32}。その解説は同書の十九回に出てくる。

（丙）双反（反切の二重利用）

「二字で二つの音を示す」双反は、以前も流行したことがある。今でも広西省の鬱林と北流の二つの県^{*33}ではまだ多くの人分かるそう。双反とは、反切を語順通りと逆から読むものとの二つを重ねた反切の略称である。例えば、

（二十七）これに先立ち、文恵太子は鍾山の麓に樓閣を建て、東田と号した。……東田とは、顛童の反切語である。（『南史』鬱林王紀）^{*34}

（二十八）杯が東西に飛び交わされて常軌を逸したありさまの中

^{*26}『北夢瑣言』：五代宋初の孫光憲の撰。唐及び五代の士大夫の話を集めたもの。

^{*27}洪邁『容齋三筆』：洪邁は南宋の人、『容齋隨筆』は記録集。五筆まである。

^{*28}俞文豹『唾玉集』：俞文豹は宋の人。『唾玉集』は残巻。

^{*29}孔・窟窿：孔の発音はkongでこれを声母kと韻母ongに分け、それぞれの要素を前後にもつ二文字で並べたのが窟窿（ku+long）。かつて漢字音をしめす時に使用されていた反切法に同じ。以下の引用文の例は洪邁当時の漢字音に基づく説明なので、現代標準音とはずれがある。

^{*30}訳は平凡社古典文学全集3『春秋左氏伝』参照。

^{*31}王廷珪は宋の人。突突はtu luanで団tuanの反切となっている。

^{*32}反切：注29参照。

^{*33}広西省の鬱林・北流の二つの県：現在の広西壮族自治区玉林市、北流市。

^{*34}『南史』：歴史書、南北朝時代の南朝（宋・齊・梁・陳）の歴史を記したもの。唐代の編纂。

新たに濾された石凍酒にはほのかに梅の香りが漂う
詩中の反切語はいつも避けられるべきもの
とりわけ心配なのが花見の時に(酒を)索郎などと
呼ぶこと(段成式「怯酒贈周繇」)^{*35}

ここで言う「東田」は語順通りの反切では、「顛」となり、逆からの反切では「童」となる。^{*36}また、「索郎」は、『水経注』^{*37}に「索郎は反語で桑落となる」とあり、桑落酒のことをいうのだ。「桑落」は語順に従う反切では索となり、逆の反切では郎となるのである(顧炎武の『音学五書』音論下に詳しい)。

3. 字義を拡大して行う析字(衍義)

字義を拡大解釈して行う析字もまた三種に分けられる。(甲)は意味を別のものに代えるもので、代換と呼ぶ。(乙)その意味から牽かれて導かれるもので、牽連と呼ぶ。(丙)はいろいろと曲折したもので、ほんやりした関係を示す表現をとり、よくよく考えてようやくわかるようなもので、演化と呼ぶ。

(甲) 代換(取り替え)

これは引用文中にしばしば見られるもので、意味は同じでも言葉が異なる同義異辞を利用する表現法である。例えば『史記』で『尚書』を引用するとき、しばしばこの方法を用いる。いま、一段落を引きその例とする。

(二十九) 曰若が古の帝堯のことを考えますに……そのすぐれて高い徳をまことによく明らかにして、まずその同族の九族までも親しみあい、九族が和合した上で、次に国内の百の姓の職分を明らかにし、百の姓の職分が明らかになった上で、天下の万の国々を和合せました。……よく百人の司人らを統べ治められて、もろもろも治績ことごとく盛んになったのでございます。帝は問いかけました、「誰を、ああ、ここに登用したらよいだろうか。」すると、放齊さまが、「おあとつぎの朱さまが明敏でございませう。」とすすめました。帝は「いや、口やかましくやで他人と争うのが好きな人物だ。ふさわしくはあるまい。」と退けました。(『尚書』堯典)

帝堯は……まず、高德をかがやかせて九族を親しくし、九族が睦まじくなると、百官は適材を適所に任じ、百官が公明正大だったので、全諸侯の国々が和合した。……誠心百官の綱紀をととのえたから、す

べてにわたって治績が上がった。堯はいった。「誰が政をやらせるのに適当だろう。」放齊が答えて言うには、「お世継ぎの丹朱さまがご聡明でございませう。」「いや、頑なで争い事が好きだ。使うわけにはいかない。」(『史記』五帝本紀)

これは、平易な言葉を使って難しい言葉に置き換えるものだ。しかし、晦渋な文体を学習した文章家は難解な言葉で平易な言葉に換えてくる。これは奇妙な現象である。以下に並べる二例は、その様な現象をあざ笑うものである。

(三十) 宋人の宋子京が……欧陽文忠と唐史を編修していると、(宋子京は)しばしば余り使わない文字を使って本来の文を変えてしまう。文忠は困ったが、指摘しづらかったので、「宵寐匪禎、札闔洪庥」の八字を書いてからかった。宋はそれが自分をからかったものとは分からず、この二句はどの本にあるのか、どう解釈するのかを訊ねた。欧陽は言う、「これがあなたの『唐書』を撰修する方法にはかなりませぬ。‘宵寐匪禎’とは、‘夜夢不祥’のこと、‘札闔洪庥’とは‘書門大吉’^{*38}のことです」宋は思わず大笑いをした。(『涵芬楼文談』五)^{*39}

(三十一) 我々の古の文学大師匠は、こうした手をよくもてあそんだ。班固先生の「紫色の鼃声、余は閨位を分かつ」は長い四つの句を、たった八字に圧縮したのである。揚雄先生の「蠢迪檢柙」は、「動けば規矩に由る」というあたりまえの四字を難解な文字に翻訳したのである。『緑野仙踪』に、塾の先生が「花」を詠じて、その中に「媳の釵俏たり矣、児の書は廢す、哥の鐘聞く焉、嫂の棒傷く」の句がある。自分でその意味を説明しているが、児の嫁が花を折って釵にした、俏麗ではあるが、そのため児が勉強をおろそかにしないかと心配だ、という意味である。下聯はややむずかしいが、彼の兄が花を折ってきたが、花瓶がないので、素焼きの壺に挿し、花の香りを聞いてみようとしたところ、兄嫁がやきもちをやき棒で花も壺もたたきこわした、というものである。これは冬烘先生への嘲笑である。しかし、彼の文章作法は、揚雄や班固と合致しないことはない。失敗は古典を用いないで、新典を使ったところにある。このいわゆる失敗によって、『文選』は遺老・遺少たちの心にとって靈験を失わないことになった。(魯迅『作文秘訣』)^{*40}

^{*35} 段成式：段成式は唐代の人。

^{*36} 「東田」(dong tian) → 「顛」(dian) となり、逆からの反切(田東)では「童」(tong) となる。

^{*37} 『水経注』：後魏の酈道元の著。河川に沿った各地の地理や伝説を記したものだ。

^{*38} ‘宵寐匪禎’とは、‘夜夢不祥’のこと、‘札闔洪庥’とは‘書門大吉’：「夜不吉な夢を見たので、門に大吉と縁起を担いだ字を書く」という簡単な文を大げさな漢字で書いたもの。

^{*39} 『涵芬楼文談』：民国呉曾祺の著。

(乙) 牽連（関係づけ）

（三十二）宝玉が言う、「帰ったらぼく、だれのしわざだったか調べて、うんとしかってやります。」林黛玉はいう、「お宅のお嬢さんたちも、それはおしかりになったほうがようございますわね。もっとも、あたしの口から言うべきことではないでしょうけれど。—あたしに対してあんなことをしたのは、なんでもありませんわ。でも万一この次に‘宝のお嬢様’とやら‘貝のお嬢様’とやらがいらしたときに、またあんなことをしたら、それこそただではすみませんものね。（『紅樓夢』第二十八回）

宝のお嬢さんとは薛宝釵のことで、貝のお嬢さんなどはいないのだが、宝・貝の二字の意味が関係する^{*41}ので、そこから推し進めて、宝玉が薛宝釵を日頃大切にしているのをあざけて、宝釵を「寶貝」と呼んだのだった。

（三十三）この言葉は、伊尊翁の史学知識を呼び起こすことになり、二人の嫁に向かって言った。「お二人さん、聞きなされ。大計を決めるとき、大事を謀るときはかならず昔のことに倣わねばならないが、それにこだわってもいけない。お前さんがた二人は、『左伝』にある‘命を稟ければ威ならず、命を専らにすれば孝ならず’の語に縛られてはいけないよ。かの晋の太子申生は、そもそも家庭の中に色々あった時期にあたっていた、したがって、彼の臣下どもに、このような議論が起こったのだ。今は我が家は無事に行っており、この話を参考にするには及ばない。命を受けるのは君たちの礼というものだし、たとえ命を専らにしてもまた我々の気遣いをなくすものだ。私はお前さんがたに肝要な話をしよう。‘閻の外、將軍これを制す’というものだ。お前さんがたにはもはや心配はあるまい。」かの二人の姉妹は、そうだと笑って答えた。叔母さんはずっと聞いていたが、姉妹に向かって尋ねた、「この話、お前さん二人は分かったかい？『左伝』とか『右伝』とかも分かったのかい。」（『兒女英雄伝』第三十三回）^{*42}

この『右伝』は世間に本当にある本ではなく、「左」「右」の意味の関係から、上に『左伝』と言っているのです、ここに持ち出ただけだ。

（三十四）しかし経験上、私が武力征伐を受けているときは、同時にかならずや文力征伐も受けていることを知っている。（魯迅『准風月談』後記）^{*43}

この「文力」の二文字は、通常一語としては使わないのだが、「文」「武」の語の意味関係により、先に「武力」と言っているのです、ここでは「文力」を使ったのである。

(丙) 演化（変移）

（三十五）もう一つには「金陵十二釵又副冊」と書いてあった。宝玉はその「又副冊」の厨子の戸を開き、中の一冊を取り出してあけてみた。すると最初のページには、一幅の絵が描いてあって、それが人物でもなければ、山水でもなくただ紙一面に水墨をぼかしたまっ黒々な雲と霧の図であった。あの方の方に幾行かの字があって、

霽月には逢い難く、彩雲は散り易し
心は天の高きに比するも、身は下賤となる
風流靈巧は人の怨みを招き
夭寿は多く誹謗に因りて生ず 多情の公子空しく
念を牽くのみ

と読まれる。（『紅樓夢』第五回）

この詩は小説に出てくる晴雯の悲惨な遭遇を書いたものだ。「霽月」「彩雲」の四字から晴雯の名前を導くことができる。「霽れる」とは、雨がやみ空が晴れることで、「霽月」とは雨がやみ月が出るという意味である。ここより、「晴」の字が導かれる。「彩雲」とは模様のある雲のことで、ここから「雯」（模様のある雲）が導かれるのである。

（三十六）隋の開皇年間、出という姓で、六斤という名の人がいた。楊素に面会しようと、名前を書く紙を持ち省の入口の所で、侯白と出会ったので、その姓を書いてくれるよう願うと、「六斤半」と書いた。名前が届き、楊素がその人を招き入れて、「君は六斤半という姓か。」と訊ねると、「出六斤です。」という。「何故また六斤半なのか。」と尋ねると、「侯秀才がそう書かれましたが、きっと間違っただけでしょう。」という。すぐに侯白を呼び、「君はどうして人の姓名を書き間違えたのだ。」と問う。答えて言うには、「間違えてはおりません。」「間違えていないなら、何故また出という姓で六斤という名の人物が、君に書いてもらおうと、六斤半となるのかね。」答えて「私は役所の入り口におり、慌ただしく聞き返す暇もなかったので、出六斤（六斤を出る）と聞くと、きっと六斤半のことを言っているのだと推測したのであります。」楊素は大いに笑った。（『太平広記』二百四十八引く『啓顔録』）

*40 魯迅「作文秘訣」：訳文は学習研究社刊『魯迅全集』巻6を参照。

*41 宝・貝の二字の意味が関係する：寶貝の二字は宝物の意味としてしばしば使用する。

*42 『兒女英雄伝』：清末の白話小説。作者は文康。

*43 魯迅『准風月談』後記：学習研究社刊『魯迅全集』巻7参照。

このような修辞法は曾て「繆語」(下文に引く『左伝』杜預注参照)と呼んでいた。繆語とは、『文心雕龍』諧讒篇にいう、「言葉をごまかし、気持ちを隠し、喩えでくらしめてその事を指し示す」という隠語の一種である。そもそも当初はこっそり意図を伝える方法で、相手だけがわかり、他の人は分からないようにしないと、目的はちゃんと果たせないというものだった。以下の二つの例がそれである。

(三十七) 楚子が蕭に侵攻した。……申公巫臣が「将士の多くは、寒さで凍えています。」と言う。王は全軍を巡回し、背をなでて慰労すると、全軍将士は綿入れを着込んだ如く感激し、蕭の城牆めがけて押し寄せた。蕭の大夫の還無社は楚の司馬卯に言って、旧知の申叔展を呼び出してもらった。叔展が無社に、「麦麴はあるか。」「ない。」「山鞠窮あるのか。」「ない。」「魚が腹冷えにかかったらどうする。」「空井戸を探して救い出してくれ。」(『左伝』宣公十二年。ここでは麦麴で空井戸を譬える。)*⁴⁴

(三十八) 呉の申叔儀が魯の公孫の有山氏に旅の食料を頼んで言った。「玉をぞろぞろと身につけていても、私につくれるでなし、うまい酒が盛り上がっていても、わたしと破れ毛布のおやじらは横目で見るばかりなのです。」有山氏は答えた。「良いのはありませんがまずいのならあります。あなたの方で首山に登り、「庚癸」とどなってくだされば、「おいきた」ともっていきましょう。」(『左伝』哀公十三年。ここでは、食料の意味を庚癸に隠している。)

さらに『列女伝』の仁智伝と辯通伝の中にも^{*45}この「空井戸」を「麦麴」でたとえ、「食料」を「庚癸」に隠すような用法と似たものがある。

以上挙げたのは、みな単純な例である。この他複雑な例として、例えば俗に「假」を「西貝」とするのは、「假」を先ず諧音の例に従い同音の「賈」と見なし、それから形を変化させる例に従って「西」と「貝」の二つの構成要素に分けてできあがるものだ。また、「豈に此の理あらんや」を「豈に此の外」と言うのは、「理」を諧音の例に従い同音の「裏(内側)」とし、その後倒反の例に従い(先述)「裏」の字を「外」の字としてできるものである。これらはみな析字格の複合体の活用例である。『世説新語』捷悟篇には以下の話がある。

魏の武帝があるとき曹娥の碑文の下を通りすぎたことがあるが、楊脩もお供をしていた。碑の裏に「黄

絹幼婦外孫壘白」の八字が書かれているのを見て、魏の武帝は楊脩にいった。「わかるか、どうかね。」楊脩は答えた。「分かります。」魏の武帝はいった。「お前はまだ言うてはいかん。わしが思いつくまで待て。」三十里ほど行ったとき、魏の武帝はいった。「わしにはわかったぞ。」楊脩が理解したところを別に書かせた。楊脩の答えは次の通りである。

「黄絹とあるのは色のある糸の意で、文字にすると「絶」になる。幼婦は少女であり、文字にすると「妙」になる。外孫とは女の子であり、文字にすると「好」になる。壘白は辛を受け入れるものであるから、文字にすると「辵(辞)となる。つまり「絶妙好辞」ということである。」魏の武帝も自分の解答を書いたが、楊脩のものと同じだったので、感嘆していった。「わしの才能はお前におくれをとること、三十里であることがやっと分かったぞ。」*⁴⁶

この例は『三国志演義』第七十一回にも見え、多くの人が知っているので、析字法複合体の活用例だと呼んで良い。その構成法は、共に形の変化(化形)・意味の拡大解釈(衍義)の二つの方法を重ねて用いたもので、「絶」を先ず形を変えて「色糸」とし、さらに拡大解釈して「黄絹」とする、「妙」は先ず形を変えて「少女」とし、さらに拡大解釈して「幼婦」とするものだ。他はこれと同じである。

付記

析字の作成法は瘦辞の重要な方法である。瘦辞の名が初めて見えるのは、『国語』*⁴⁷である。その中の「晋語」(五)に以下のようにある。范文子があるとき朝廷からずいぶん遅く帰ってきた。彼の父范武子が彼に尋ねた、「どうして遅くなったのか。」彼は言う、「秦の客が朝廷にて瘦辞を出したのです。こちらの大夫は答えることができませんでしたが、私はこのうち三つわかりました。」彼の父は聞くや怒って、「大夫はできなかったのではない、目上の者に譲ったままだ。お前のようなヒヨコが朝廷にて三度も出しゃばるようでは、私はもう晋国にはいられまい、もうすぐ終わりだ。」と行って、彼を打擲したのだった。これが瘦辞に関する最初の例である。韋昭の注では、「瘦は、隠である。意図を隠した巧みな表現で朝廷に問いかけたのである。」と解する。この解釈は、瘦辞とは隠語であって、それは意図を隠した巧みな表現をもつ言葉のことなのだ。とはいえ、その時秦からの客

*⁴⁴ 訳文は岩波文庫『春秋左氏伝』(小倉芳彦訳1989)を参照。庚癸は、軍で食料を指す隠語。杜預注によれば、庚は西を指し穀物をたとえ、癸は北で水を指すという。以下も同じ。

*⁴⁵ 『列女伝』:仁智伝には臧文中の手紙に謎かけの偽装の話があり、辯通伝には甯戚が「白水の歌」で気持ちを伝えようとした話や他に謎々の話があるが、この事を指すか。

*⁴⁶ 訳文は平凡社中国古典文学大系9『世説新語/顔氏家訓』を参照。

*⁴⁷ 『国語』:作者不明だが、漢代には既に成立、先秦の各国の話を集めたもの。訳文は平凡社古典文学体系7『戦国策/国語/論衡』参照。

がなと言ったかは、既にわからず、その内容をはっきり知る手立てはない。後世の修辭の情況から推測すれば、それはおそらく析字の事だろうと概ね推定できよう。このような瘦辭は、時には隱語と称された。例えば、『漢書』東方朔伝に郭舎人が、「私めは再度東方朔どのに隱語について訊ねたいのですが、当たっているかどうか。」と言っている。瘦語と喚ぶこともあった。例えば宋孫觀の詩に、「瘦語はなお黄絹婦を伝え、多情は好しく紫鬚の翁にあり」とある。現在は瘦語や隱語と所謂謎々を混同している。しかしながら、「謎なるものは、その言葉をあれこれ加工し、惑わせるもの」(『文心雕龍』諧謔篇に見える)で、重点は知恵比べにあるが、瘦語や隱語となると面白みや暗示に重点があって、その間には違いがある。或いは謎々は瘦語から「化」して出来たものと言って良いかもしれないけれども、瘦語と謎々を混同して同じものだとみなしてはならない。謎語については、別に専門書もあることなので、ここでは言及はしない。

二 藏詞

使用する言葉が、よく知られた成語の中にあるので、その語を表に出さず、成語の中の別の部分によってその言葉に代えること、それを藏詞という。例えば、

- (一) 兄弟の語は 友于兄弟
(『尚書』君陳)の成語の中に見え、
- (二) 孫の字は 貽厥孫謀
(『詩經』文王有声)の成語の中に見え、
- (三) 黎民の語は 周餘黎民
(『詩經』雲漢)の成語の中に見え、
- (四) 日月の語は 日居月諸 胡迭而微
(『詩經』柏舟)の成語の中に見え、
- (五) 禍福の語は 禍兮福所倚 福兮禍所伏
(『老子』五十章)の成語の中に見え、
- (六) 三十の語は 三十而立
(『論語』為政篇)の中にある

などを踏まえて以下のような修辭が見られる。

- (一) 「友于」によって「兄弟」に代える。
(例) 楽しみは二つある、一つは母の温顔に接しうること、もう一つは友于(兄弟)にあえることだ。(陶淵明「庚子歲從都還」詩^{*48})
- (二) 「貽厥」によって「孫」に代える。
(例) (到漑の孫) 蓋は若くから聡明であった。……到漑が御詩に和すたびに、お上は手招きして到漑をからかい、「貽厥(孫)の力を借りたのか」

と言うのだった。(『南史』到漑伝)

- (三) 「周余」によって「黎民」に代える。
(例) 怯えた周餘(黎民)は、ついに塗炭のなかに沈淪することになった。(『晋書』六十四論賛)
- (四) 「居諸」で「日月」に代える。
(例) 朝夕思わざる事があろうか、君のために居諸(日月)を惜しむ。(韓愈「符読書城南」詩)
- (五) 「倚伏」で「禍福」に代える。
(例) 思いがけない出来事というものはかくあり、北に住む塞翁はよくその倚伏(禍福)を理解していた。(班固「幽通賦」)^{*49}
- (六) 「而立」で「三十」に代える。
(例) 阿Qも本来は行い正しい人間である。彼がどんな大先生に教えを受けたのかわからないが、彼は「男女の別」には従来非常に厳格であり、異端一たとえば若い尼さんやニセ毛唐の類一を排斥する正気は十分に持っていた。……ところがその彼が「而立」の年近くなって、尼さんのためにふわふわにされてしまった。(魯迅『阿Q正伝』)^{*50}

以上の「友于」「貽厥」「周余」「居諸」「倚伏」「而立」などは藏詞語と呼んで良い。その中は区分が可能で、「友于」「貽厥」「周余」などは、使う意味が後ろ側にあり、話の中ではこの後ろ側が隠されるので、後半を歇(かく)す藏詞語と呼ぶ事ができる、つまり前人の言う「歇后(後ろをかくす)語」というものである。「居諸」「倚伏」「而立」等の類は、使う意味はその前半部分であって、会話の中ではこの前半部分が隠されている。前例に従って言えば、「前半を隠す藏詞語」と呼ぶうるだろう。以前これを「藏頭語」と称した人もいた。

以上2種の藏詞はかつてよく使われたが、ずっと歇后形式^{*51}のほうに極めて多数を占めてきた。口語の習慣によって、その後歇后語がいっそう多くなり藏詞のほとんどになってしまった。世間で使う藏詞は、もちろん単純なもので、例えば、

「下馬威風(新任の上司が威張り散らす)」の成語から「下馬威」と言うだけで「風」の語の意味を示すもの、

「牛頭馬面(悪党連中)」の成語から「牛頭馬」と言うだけで「面」の語の意味を示すもの、
などだ。あるいは、さらに音の類似を利用したものもある。例えば、

「猪頭三牲(祭りの供え物)」に基づき「猪頭三」と言い「牲」の同音の「生」の字の意味を示すもの、

^{*48} 陶淵明「庚子歲從都還」詩：訳文は岩波文庫『陶淵明集』を参照。

^{*49} 班固「幽通賦」：班固は後漢の人。

^{*50} 魯迅「阿Q正伝」：訳文は学習研究社『魯迅全集』2巻を参照。

^{*51} 歇后形式：以下に例が挙げられるように、中国語の会話などに良くでてくる表現の一つに「歇后語」と呼ばれるものがある。日本語には訳しにくい言葉なので、歇后の字をそのまま用いている。ただし現代中国語ではこの後に示される謎解き型が主流である。

「糊裏胡塗 (ほんやりする)」に基づき「糊裏糊」と言い「塗」の同音の「賭」の字の意味を示すもの、など。このようなものにしても、ほとんど後ろを蔵す歇后語に属さないものはない。その理由は、概ねのところ歇后語が利用する言葉が後ろにあるので、比較的内容を想像しやすいからであり、前に遡って推測する必要もないため、比較的分かり易いので、長年に使われているうち、成語の後ろの部分と言って前の部分を推測させる蔵頭語は淘汰されて、だれも口頭語で運用する人はいなくなったためだろう。

中国の各地にはこのような歇后語を愛用する人が多い。作り方の一つは、四字や五字の語でできている成語を歇后語の拠り所にするものだ。たとえば解放前の旧上海で「猪頭三」の語がよく使われたことがあったが、これは四字の成語に基づいて作られたものである。『滬蘇方言記要』^{*52}に「この語は初めて上海に来た者と呼ぶ名詞である。隠されている‘牲’は‘生(慣れていない)’と同音であり、初めて来た人は到るところ不慣れなのでそう呼ぶのである」と述べる。つまり「猪頭三」の語が「猪頭三牲」の歇后語だというのである。しかし‘牲’と‘生’が同音のため、析字法の中の諧音法を使って一ひねりしたものとなっている。現在ではこのような歇后語は少なくなってしまった。もう一つの方法は謎解き語を利用して歇后語を作る方法である。謎解き語には単純なものもある。例えば

碁盤の上で将棋を指す—やり方がそぐわない

胡麻が花咲く—次第に上に向かって開く(向上する)等の類である。また諧音を使ったものもある。例えば

猪八戒の背中—悟能wunengの背bei

(wuneng無能のbei輩)

小葱で豆腐を攪拌する—青qing二白

(一清qing二白:明々白白々)

などの類は、みな謎かけと解答の二つの部分でできている。前半が謎かけで、後半がその解答となる。私たちが小説などの文芸作品を読むときにはしばしば目にするのである。しかし、小説などの文芸作品のなかにあらわれるのは、ほとんど謎かけに続けて解答がでていた。ところが現在、一般の人々の口頭の謎解き語のほうは謎かけ部分だけ言って解答を省くのが常である。例えば、「碁盤の上で将棋を指す」とだけ言って、「やり方がそぐわない」意味を伝えたり、或いは「猪八戒の背中」と言って「無能の輩」の意味を伝えるというものだ。これは新興の歇后語でもある。この新興の歇后語は先に述べた従来の歇后語と概ね以下の二つの違いがある。(一) 新興

の歇后語が歇后に用いる成語は、もともとは二句であるが、一句を言わなくても、形式上は成語とされること。(二) 新興の歇后語が隠す部分はしばしば一語に限らずに幾つかの言葉でできている事。ここから新興の歇后語は内容が比較的豊かで、形式も自然なものであることがわかって来よう。実際のところ、これは先の歇后語が発展して現れたものなのである。旧来の歇后語と分けた方が都合が良いので、これを別に新型歇后語と呼ぶことにしよう。

新型歇后語が用いる成語はみな口頭語だが、旧来の歇后語はすでに文言文の中に現れていた。旧来の歇后語がその当初用いた成語は、みな『詩経』『尚書』等の幾つかの知識人がよく知る古典籍にあり、その後ようやく一般の人の口頭に上がるようになった成語によるものである。さらに、従来の歇后語の運用も始めはその意味はほとんど理解できるものではなく、後になってから同様の状況にもちいると大変有効だと分かったのだ。今、以下に一つの例を挙げる。

呉中の黄生は唇がめくれていたので、人は「小黄窳嘴(黄君は兔の唇)」と呼んだ。ある寺で勉強していたとき、ある日、寺僧がウドンを持ってきた。熱さで手にやけどして下に落としてしまったので、黄生は歇后語を作ってからかった。

「光頭滑～、(麵)

光頭浪～、(湯)

光頭練～、(擲)

光頭勒～、(忒)。]つまり、「ウドンをむだにした(麵湯擲忒)」となる。僧もまたすぐさま応えて

「七七八～、(小)

七青八～、(黄)

七孔八～、(窳)

七張八～、(嘴)。]要するに「黄君は兔唇(小黄窳嘴)」の四字を隠したのだ。黄生もまた大笑いだった。(清・褚人獲『堅瓠二集』一)^{*53}

口頭語に用いられる蔵詞はこのような諧謔味を帯びたものである場合が多い。

三 飛白

明らかにその間違いを知っていながら、故意にその通りとして続けるものを、飛白と呼ぶ。ここにいう白とは、つまり白字(当て字)の「白」のことだ。当て字はそもそも『後漢書』尹敏伝にあるように「別字」と書くべき

*52 『滬蘇方言記要』:未詳

*53 ここに引かれる最期の字を省略した四字語は、当時の成語らしい。光頭を使った成語はよくわからないが、七と八を使った成語の方は今でも使われている。例えば七七八小:大小不一の状態、七青八黄:財産のこと等

だが、私たちは通常白字と呼んでいる。当て字を故意に利用することを、飛白と呼ぶのである。

文章や会話における飛白の使い方は概ね二種類ある。一つは記録で、もう一つは援用だ。

（一）記録されたもの

これは吃音（吃澁）や言い間違えをした場合、その吃音や言い間違えの言葉を記録したものである。例えば『尚書』顧命篇の以下の文

（王が言うには、先の文王・武王は）法を定め教えを布かれ、（人々は）肄肄として努めて誤ることなく、そこで殷を伐つことができ天下統治の大命を成し上げたのである。

江声の『尚書集注音疏』^{*54}では、「肄は習（ならう）である。重ねていったのは、病気が進み息が切れたので言葉が吃音になったのだ」とある。『史記』高帝本紀には以下のようにある。

五年、諸侯及び将相たちはあいともに漢王を尊んで皇帝とすることを願った、漢王は三度譲ったが、やむをえず、「諸君がどうしても国家にとって便便があると考えるなら……」と言って甲午の日に、汜水の北で皇帝に即位した。

「便便」及び「肄肄」、は共に吃音の発言をそのまま記録したのである。さらに、王安石「戸部郎中贈諫議大夫曾公墓誌銘」中では、「可畏」を「克畏」に書いている。

かつて諫議大夫知蘇州の魏庠、侍御史知越州の王柄は、政治は下手なくせに、自分勝手に口出ししていた。魏庠は昔の恩義を利用して昇進し、王柄はおだてられるのが好きだった。曾公がやってくると、これを弾劾し、奏上した。皇帝は驚き、「曾某がついに魏庠を片づけたか、克畏なことである。」といった。克畏とは、可畏（畏るべし）のことで、言葉がつまってこうなってしまったのである^{*55}。

魯迅は「アヒルの喜劇」（『婦女雑誌』1922年12号に見える）中で、「エロシェンコ」を「エロシーコ」と書いている。

おたまじゃくしは群がって水の中を遊んでいた。エロシェンコ君もよく足を運んで彼らを訪問した。ときどき、子供が彼に報告した。「エロシーコさん、おたまじゃくしに足がはえましたよ。」すると彼はうれしそうに微笑して言った、「ほう。」^{*56}

曹雪芹は『紅樓夢』第九回では、『詩経の詩』の「野の

萃を食べる」を「荷葉に浮萍」と書いている。

そのあと賈政は「宝玉につきそって行くのはだれだ。」とたずねた。すると、「はあっ。」という返事が外からきこえ、たちまちどやどやと、三、四人の大男がはいてきて、片膝折って挨拶した。みれば、その中の一人は宝玉の乳母の息子の李貴と呼ばれるものであったので、「おまえは一日じゅう若について塾にかよっていたようじゃが、いったい若はどんな本を習っているのか。どうせくだらぬものを読んで腹の中にしまい、手のこんだいたずらを仕込んだぐらいが関の山じゃろう。いまにわしの手が空いたら、まずお前の頭の皮をひんめくり、それから、あの将来の見込みのないやつを勘定をつけてやるわい。」これを聞いて、李貴あつと驚き、あわてて両膝をつく、帽子をむしりとり、ゴツゴツと頭を地にたたきつけて、しきりに「はい、はい。」と答えながら、また申しあげた。「若さまはもう『詩経』の第三冊めの、ええそのなんでもございますか『攸攸鹿鳴、荷葉浮萍（本当は食野之萃）』とかいうあたりまでお習いあそばしてございます。はい、わたくしはけっして嘘いつわりは申しません。」その答えに、満座はどっと笑いくずれた。さすがの賈政も思わずふきだした。

「克畏」「エロシーコ」「荷葉浮萍」などもみな言い間違えた言葉をそのまま記した実例である。『史記』張蒼列伝になると

（高）帝が太子を廢して、戚姫の子の如意を太子に立てようとするにおよび……周昌は朝廷でこれについて諫争すること激しかった。上がその意見を問うと、昌は生來吃音だったので、いよいよ苛ら立って言うのだった。「臣は口では申しあげられませんが、臣は、期期して（極めて）その不可なることを存じております。陛下が太子を廢そうとされましても、臣は、期期して（絶対に）、詔を奉じません」

とあって、吃音で他の語になってしまった有名な例になった。「期」は「綦（極めて）」からの訛りである。その意味は我々が「極めて正しくないと思う」或いは「絶対反対だ」というときの「極」の意味である。本来は重複させる必要はない。しかし、周昌は本来吃音であり、その時腹も立てていたもので、つい言葉がなまって「期期」と出てしまったのだ。しかし、『史記』はそのいい間違えの「期期」をそのまま記した。そこで、「期期」はよ

*54 江声の『尚書集注音疏』：江声は清朝の考証学者。この部分は馬融の注の引用。

*55 「克」は所謂入声（内破音）に属す。本来論語にある「可畏」と言おうとして、驚きのあまり言葉が詰まったため、「おそるべし」と言わなければならないところを「おっそるべし」と類似音で内破音である入声の克の字を用いて記したということ。皇帝の動揺を表現するもの。

*56 訳文は学習研究社『魯迅全集』を参考。

く知られる語となったのである。このような飛白は、概ね当時の発話の実際状況を記録したもので、その他に特に含むところがあったわけではない。そのまま記録するかどうか、それは作者次第である。従って、「期期」の例では、『漢書』ではそのまま「期期」と記しているが、『史記』での「諸君がどうしても国家にとって便便があると考える……」の例は、『漢書』では「諸々の侯王が天下の民のために便があると考えるならばよい」と改めていて、飛白の表現法にしたがってはいない^{*57}。

(二) 援用されたもの

これは吃音や言い間違えをする人物の場合に、吃音や言い間違えた言葉を持ち出して諷刺をしたりからかったりするものである。魯迅は「估学衡」の中でこのやり方を使って学衡派の復古主義者を諷刺している。

『中国で社会主義を提唱することの検討』では、「すべて理想学説の発生には、みな、歴史上の背景あり、決して架空の虚説にはあらず。ユートピアを造るは、無病之呻吟をなす者なり」と言っている。「イギリス」のモーアの本を調べてみても、Pia of Utoとはどこにも書いてはいない。「之・乎・者・也」式の文語文は止めたくてもやめられないのだとしても、ほかの古典から言葉をさがすことも、難しいこともなかろうに、何も好んで、真ん中によけいなものを加える必要があるか。昔も「觀史之陀」というのを聞いたことはないし、今も「寧古之塔」とは言わない。かくも奇妙な文句をひねるのは、実に「有病之呻吟」と言うべきだろう。(『熱風』)^{*58}

また、『聊齋志異』嘉平公子篇には、嘉平某公子の文意の通じない話を記す。

ある日、公子は召使いを諭す書を、机の上に置いておいた。中にはとても誤りが多く、「椒」が「菽」となり、「薑」が「江」となり、「恨む可し」が「浪む可し」となっていた。奥さんがそれを見ると、その後以下のように記した。「どういうわけで浪が立ち、花椒に江を生じるのでしょうか、このような婿さまでは、妓女になる方がましです。」

また、『堅瓠首集』(三)には、

ある人が、枇杷を沈石田に贈ったが、間違えて琵琶と書いてしまった。石田は返答に次のように書いた。

頂きました琵琶は、箱を開けて見るに、聞こうとしても音は聞こえませんでした、食べてみますと

おいしゅうございました。昔、琵琶を聞いた司馬が江岸に涙を揮い、明妃が琵琶を弾いて辺塞に怨みを発したのは、共に一口食べたかったからでございましょう。その後これをつぐとすれば、楊柳が暁の風に揺れ、梧桐が夜雨に音を立てる時でございましょうか。

また『堅瓠七集』(四)には、

景泰中、ある廕生が蘇州監郡となったが、言葉に暗く、ある日翁仲を仲翁と呼んだので、或ものが字をひっくり返す詩を作り婉曲に諭した。

翁仲を仲翁とするとは、強勉(勉強)に力努(努力)が足りません。世出(出世)など思いの外、蘇州で判通(通判)が精一杯。

等が皆この例である。しばしば引かれる「汗牛の棟充たす」や「意表の外」^{*59}等の言葉もこの類いである。

人々によく知られている例を挙げるなら、『紅樓夢』第二十回の以下の段落の中、

(宝玉と林黛玉)二人がそんな話をしているところへ、湘雲がにこにこしながらやってきた、「愛兄様、林のお姉さま、あなたがたは毎日いっしょに遊んでいらっしゃるくせにさ、あたしが久しぶりにまいても、ちっともかまってくださらないのね。」黛玉は、笑いながら、「舌っ足らずのおしゃべりさん、‘二兄様’とさえ言えずに、愛兄様、愛兄様だって！こんどまわり将棋をなさるときには一愛三(一二三)っておっしゃるのでしょうか。」とひやかすと、宝玉、「あんまりこの人の口まねをしていると、あなたまでいまに舌っ足らずになりますよ。」……湘雲は笑って言った、「……あたしね、いまにあなたが舌っ足らずのだんなさまをお迎えになって、年がら年中愛厄愛厄(好きだ好きだ)と聞かされる日のくるよう祈ってますわ。」

ここにあちこち出てくる愛aiの字は、最後の愛の字の意味が異なる以外は、共に「二er」の音の訛りである。しかし、その中にもいささか区別があって、「愛兄様」の「愛」は第一類の記録用法で、「一愛三」の「愛」は第二類の援用法である。

四 鑲嵌^{*60}

話をゆったりさせたり丁重にしたい時に、故意に余り

^{*57}『史記』は太古から前漢の武帝の時期まで記し、『漢書』は前漢一時代の歴史を記しており、一部重なる部分がある。同様の話でもそれぞれの記事に表現の違いがあるということ。

^{*58}訳文は学習研究社『魯迅全集』を参照。なお、「有病の呻吟」は本来ある慣用句の「無病の呻吟」をもじったものだが、中国語では「無病の呻吟」は、通常「無病呻吟」と書くので、「有病呻吟」に更に「之」(之は具格を示す助詞)の字を入れ「有病之呻吟」と言って皮肉ったもの。

^{*59}「汗牛のこれ棟を充たす」や「意表の外」:「汗牛充棟」「意表外」だけで済む慣用句に「之」(～の)の字を入れてわざわざ「汗牛之充棟」「意表之外」と言うこと。

重要でない文字を入れ込んで重要な言葉を引き延ばす事を、鑲字（文字の埋め込み）と呼ぼう。鑲字には虚字^{*61}や数字を用いることが最もよく見られる。例えば『左伝』昭公二十五年に、「鸛鶴（九官鳥の類）が飛んできて巢作りをした」事に対して、師己が童謡を引いて次のように言っている。

鸛之鶴之、公は国外においだされ……

鸛鶴に之を二字加えている。『漢書』叙伝では、

栄如辱如、機あり枢あり（栄辱には 運機や本源があるものだ）

栄辱に如を二つ加えている。また『何典』^{*62}巻四では、

これは、其れ容且つ易なことだ（これはとても容易なことだ）

容易の二字に其と且の二字を埋め込んでいる。『何典』巻九では、

彼らは命じられて派遣されたまでだ、打ち殺したらそれも冤哉枉也（冤枉は冤罪のこと）ではないか。

冤枉の二字の哉と也の二字が埋め込まれている。郭沫若訳の『戦争と平和』一之二十七では、

彼はボナパルトが一人の平者常也（平常：平凡）なフランス人にすぎないと信じた。

平常の二字に者と也の二字が埋め込まれている。以上みな虚字を埋め込む例である。このように埋め込まれた文字に意味はなくとも、リズムを緩くして力強くする作用があるので、埋め込まれた言葉の音が伸ばされることで、読者や聞く者に必要な注意を向けさせるのである。従ってその効果は重複や繰り返しに似ており、時には重複や繰り返しの代わりとなる。先に引用した童謡などは、最後の句では「鸛鶴鸛鶴、出るときは歌うが戻りは哭くよ」と作っていて、先に引いた初句と遠く対応したものとなっている。数字を埋め込む場合も、虚字を埋め込む場合とほぼ同じである。干浄（すっからかん）の二字に一二の二字を入れて、一干二浄とするようなものである。

林之洋の鬚は既に焼けて一干二浄（さっぱり無くなる）だった（『鏡花縁』第二十六回）

「不做不休」（やり始めたら最後まで）の四字に一二の二字を加えて、一不做二不休とするものとしては、

いっそのこと一不做二不休（やり始めたら最後まで）でやっ飛ばそう。（『鏡花縁』第三十五回）があり、

差錯（起こるかも知れない間違い）の二字に一二の二字を埋め込めば、一差二錯となる。

もしあなたの父に何か一差二錯（間違い）などがあ

れば、またもや遅れることになって、……（『紅樓夢』第十七回）

また紅白の二字に一二の二字を埋め込んで、一紅二白とするものがある。

丁言志は恥しさのあまり一紅二白（赤くなったり青くなったり）のさまで、うなだれて詩巻を取め、懐中に入れると、こそこそ二階から下りて家に帰って行った。（『儒林外史』第五十四回）

このほかに、清楚の二字を一清二楚に作り、清白の二字を一清二白に作るなどは、すべて音を緩めて力を加える作用に他ならず、しかも重複や繰り返して取り替えられるものもある。一干二浄は干干浄浄でもかまわないし、一清二楚は清清楚楚に代えてもかまわないのである。しかし、埋め込む数字は、数字が一二以上になると、その意味にいささか異なるところが出てくる。

瞎話（でたらめ）に 三四 を埋め込んで 瞎三話四 とするもの

対面（前方）に 三六 を埋め込んで 三対六面 とするもの

平穩（安定している）に 四八 を埋め込んで 四平八穩 とするもの

接連（つながる）に 二三 を埋め込んで 接二連三 とするもの

乱糟（乱雑）に 七八 を埋め込んで 乱七八糟 とするもの

低下（位が下がる）に 三四 を埋め込んで 低三下四 とするもの

零落（ばらばら）に 七八 を埋め込んで 七零八落 とするもの

等は、「瞎話」「対面」の語がもつ本来の意味に加えて、「多い」というもう一つの意味を帯びるようになる。しかし、この加わる意味は実際にはそれほど強いものではないので、「瞎三話四」などの言葉は、瞎話（でたらめ）で言っている内容がたとえ二句程度の少なさでも、やはり用いることができるし、「接二連三（つぎつぎにつながる）も、たとえ七八種の事柄がつながる場合でも、やはり用いてかまわない。このほかに「歡喜」に「天地」を埋め込んで「歡天喜地」（大喜び）にしたり、「油滑」（ずるい）に「頭腦」を埋め込んで「油頭滑腦」（軽薄・狡猾）に改めたりするなど、用法は概ね同じである。例証は極めて多いので、挙げる必要はないだろう。

文字のはめ込み（嵌字）となると、一文の中に故意に

^{*60} 鑲嵌：鑲も嵌も共に「埋め込む」とか「はめ込む」という意味の漢字なので、通常一つの修辞法と見なされるが、鑲法と嵌法で分けて使う場合もある。したがってそれぞれ「埋め込み法」、「はめ込み法」と訳した。鑲法とは、単にその場所に無意味の言葉を入れ込むことで、嵌法とは、単語や一連の言葉を複数箇所に入れ込んで行く方法と呼ぶようである。（『漢語修辞格大辞典』上海辞書出版社2010参照）

^{*61} 虚字：具体的な事象を示す意味を持たない語で、格を示す助詞や感嘆詞・語調を整える言葉などが含まれる。

^{*62} 『何典』：清末の白話小説。

幾つかの特定の文字をはめ込んで行くもので、無理なく用いるのはかなり難しい、従って使用も極端に少ない。詩歌や歌曲、小説などでたまたま見かけるくらいだ。例えば

江南は蓮が採れるよ 蓮の葉はまん丸だよ 魚がその
間で遊んでいるよ
魚は遊ぶ蓮の葉の東
魚は遊ぶ蓮の葉の西
魚は遊ぶ蓮の葉の南
魚は遊ぶ蓮の葉の北

が『楽府詩集』^{*63}卷二十六に見える。「東西南北」の四字をそれぞれはめ込んで行くのである。また、

蘆の花さく早瀬に小舟あり
俊傑黄昏に一人さまよう
義を最後までつくすことはそもその運命
反身して難を逃れるなら愁いもない

が『水滸伝』六十回に見える。これは「盧俊義反す」の四字を句の初めにはめ込んで作ったものだ。

二つの並列の或いは対応する二語を、離して並べる拼字法と呼ばれるものは、鑲嵌法を使った一種とみなしうる。これは各種の文章の中に非常に多く見られる。例えば、「詳細情節」（詳細な事情の経過）と言いたいとき、「詳細情節」とは言わず、「詳細細節（詳しい情況細かな経過）」と言うなどは、この用法の運用である。実例を以下に挙げる。

二人の女中まるで川の流れるように休むひまもなく家前屋後（家屋の前や後：家屋中）を飛びまわり。ひっきりなしに「太太、太太、太太」と叫んでいる。（『儒林外史』第二十七回）

このときそなたといっしょに空手で空しくわが家にもどってみると、男呻女吟（男女の子供が呻吟する：息子たちはうめき、娘たちはうなり）で、四方の壁だけがひっそりと立っている（杜甫「乾元中寓居同谷県作歌」七首之一）^{*64}

山重水複（山は重なり水は連なって・山水は重り連なって）もう路は途絶えたかと思うとき、柳茂り花美しき景色が見えてまた一つの村が現れる（陸游「游山西村」詩）

林紓著『畏廬論文』^{*65}の中の「拼字法」はこの技法について論じたものだ。林紓は次のように言う。「古文の拼字法と填詞の拼字は、やり方は同じだが字は異なる。……詞の中の拼字法はよく見かける文字を用いるが、一つに合わさると、異なる様子を見せる。例えば花柳は常用の文字だし、昏暝の二字もまた同様だが、これを合わ

せて柳昏花暝とすると、従来と異なるものになる。玉香は常用するし、嬌怨の二字も同様だが、これを併せて玉嬌香怨となると違ったものになる。煙雨は常用するし、鬢恨の二字も同様だが、併せて恨煙鬢雨となると違ったものになる。綺羅は常用するし、愁恨の二字もまた同様だが、併せて愁羅恨綺となると異なったものとなるのである。」その後、林紓は古文中の拼字法について「例えば『漢書』揚雄伝の勒垂崇鴻のばあい、崇は高、鴻は大の意味、顔師古の注は、‘高名を勒し、大業を遺す’とする。勒崇垂鴻はそれをまとめたものである。また、騁者奔欲は、者は嗜の字、嗜欲の字は人の常に用いるもの、奔騁の二字と組み合わせると、たちまち違ったものとなる。」と述べる。最後に、林紓はまた、「このようなものは、人々によく見慣れたものを基に指摘したもので、古人の工夫が見えるところである。これが理解できない者は、私が細かな文字遣いにあれこれうるさく言うことで、人々を魔道に引き入れようとしていると思うかも知れないが、このような罪状は私の負うところではない。そもそも古文には元よりこのような拼字法があり、古文派の韓愈や柳宗元もまた同様なのだ。つまり全体の状況や勢いというものは文章の大枠で、細かな表現は小技に属するものだが、やはり知っておかねばならないのである。大きな部分に注意をしたならば、これらの末節にも意識を及ぼさないわけにはいかないのである。」と弁明している（林紓『畏廬論文』59～60頁）

五 複疊

複疊とは、同一の文字を一緒に二度三度使う修辞法である。それには二種類ある。一つは離れたもの、或いは続けて使うが文字は同一でもその意味に違いがあるので、これを複辞と名付ける。もう一つは連続して用いるもので、意味もまた同じものだ、これを疊字と名付ける。

一. 複辞

（一）知るを知るとし、知らざるを知らざるとす、これが知るということだ（『論語』為政）

（二）自分の身内の年寄りをいたわる心を他の一般のお年寄りに推し及ぼし、自分の家の幼い者をいつくしむ心を他の一般の幼い者に推し及ぼす（『孟子』梁恵王上）^{*66}。

（三）是を是とし非を非とするのを知といい、是を非とし非を是とするのを愚という。（『荀子』修身）^{*67}

（四）農は農として、士は士として、工は工として、商は商と（して本分を尽く）す（士農工商がそれぞれ

^{*63}『楽府詩集』：宋の郭茂倩の編。

^{*64} 訳文は岩波文庫『杜甫詩選』（黒川洋一編）を参照。

^{*65} 林紓著『畏廬論文』：林紓は清末の文章家。

れの職業につくすべきであること)、根本は同じ原理である。(『荀子』王制)

(五) 万物として生じているものがあり、生じているものを生じさせるものがあり、形を持つものがあり、形を持つものに形あらしめるものがある。声を出すものがあり、声を出すものに声を出させるものがあり、色どりを持つものがあり、色どりをもつものに色どりを持たせるものがあり、味を持つものがあり、味を持つものに味をもたせるものがある。(『列子』天瑞)^{*68}

(六) 柳州の柳刺史は、柳河のほとりに柳を植えた。(柳宗元「種柳戯題」)

(七) あるものは、自分一人の利益を利益とはせず、天下すべてにその利を受容させ、自分一人の損害を損害とはせず、天下にその損害を消散させる。(黄宗羲「原君」)

これらは、陳駢が「交錯の体」と呼んだものである。『文則』^{*69}卷上丁節第二条にいう。

文には交錯の体というものがあって、まるで言葉が入り乱れているようだが、これは道理を明らかにしようとする所に主眼があり、道理が明らかになるまで続くものだ。『書経』(大禹謨)に、「これを念じればここに在り、これを廢してもここに在り、これをいえばここに在り、これを出すもここに在り。」と言う。『莊子』(齊物論)に「始めというものがある。ところで始めから始めのないものがある。始めから、その初めから始めのないものはないというものがある。」と言ひ、また、「指が指でないことをさとらせようとするよりは、指でないものによって、指が指でないことをさとらせる方がましである。」という^{*70}。『荀子』(富国)に「人民に利益を与えないでこれを利用するだけというのでは、利益を与えてからこれを利用する場合の有利なのにとても及ばない。人民に利益を与えてからこれを利用するのは、利益を与えるだけで利用しない場合の有利なのにとてもおよばない。」と言う^{*71}。『国語』(『晋語』六)には「成人してからはその始めは善人と交際する。始めに善人と交際をすれば、善人が善人を紹介して、不善の者は近づくすべがない。始めに不善のものと交際すれば、不善の者が不善の者を紹介して、善人が近づくすべがない。」と言う。『穀梁伝』

(僖公二十二)では、「人が人たる所以は言葉にある。人でありながら言葉を使えないようでは、何を以て人であろうか。言葉が言葉である所以はその信頼性にある。言葉を使いながら信頼できないようでは、何を以て言葉とよべるだろうか。信頼の信頼たる所以は道に沿うことだ。信頼を説きながら道から外れるようでは、何を以て信頼と言えようか。」と言うのがそれである。

陳駢が引用する各例は、共に頗る適切で、先に挙げた七つの例の参考にしてほしい。

二. 疊字

(八) 尋ね尋ねても 何がみつかるわけではなく 気持ちはずさみ寂しく空虚へ 温かくなってもまだ寒いこの季節、息もつきがたい時。(李清照「声声慢」詞)

(九) 耳をそばだてて聞いている、忍び足のおと、こっそりこっそりと

あの端正で、美しい、鶯さん (『西廂記』酬韻)

(十) 師弟たちは烏鷄国を離れると、暮れては休み明けては進みで、半月余り行きました。すると高い山が見えました。……その様子は、

高い高い 山の頂上は大空に届き、深い深い、谷間は黄泉国のように。山の前に見えるはモクモクわき立つ白雲、モヤモヤとわき上がるわき上がる黒い霧。赤い梅に緑の竹、繁る柏に青い松。山の向こうには高くそびえる鳥居が有り、その後ろには奇々怪々な妖怪の住む洞窟がある。洞窟の中はぼたぼたと湧き水がしたたてて泉ができ、泉からは水がくねくねと流れ出て谷川を作る。さらに見えるのは、あちらこちらを飛び回って果物を捜し仏に献ずる猿や、によきによきと枝分かれした角を持つ鹿、ほんやりほんやりと人をながめる獐。夜になると巴山を登ってねぐらに帰る虎、朝には波をあげて水から出る龍の姿。洞穴の入り口に登ればザザザッと響き、鳥はパタパタと音を立てて飛び上がる。林にはのっしのっしと獣たちが行くのが見える。こんな鳥や獣の姿を見たならば、恐ろしくて心臓がドキドキ飛び上がるだろう。ああ、おどろきの山のめちやくちゃ山。千塊の玉を染めなす青黒い石、万道の煙にかぶさる碧緑の紗 (『西遊記』第四十回)^{*72}

(十一) 夕焼けたなびく 西の窓の外

^{*66}『孟子』梁惠王上：訳文は平凡社中国古典文学体系3を参照。

^{*67}『荀子』修身：同上

^{*68}『列子』天瑞：訳文は平凡社中国古典文学体系4『老子/莊子/列子/孫子/呉子』を参照。

^{*69}『文則』：南宋陳駢の撰。中国では早期に属す修辞研究の専著。六経諸子の文章を対象としたもの。訳は、『文則注釈』(書目文獻出版社1988 劉彦成注釈)を参照。

^{*70}訳文は平凡社中国古典文学体系4『老子/莊子/列子/孫子/呉子』を参照。

^{*71}訳文は平凡社中国古典文学大系3『論語/孟子/荀子/礼記』を参照。

窓の下には家々が育てる青菜
 空は赤く 畑は緑に
 夕日が落ちるかやぶきの屋根
 屋上からは上がる炊事の煙
 すくすくと ゆらゆらと ぼつぼつと ひ
 らひらと
 真っ直ぐ空へと登っていく (佚名「西窓晚
 望」)^{*73}

(十二) 見えるのは黒々とした空一面に雲が垂れ込め、ザーザーと降り続く瀟湘の地の夜雨。今向かう細々としてぼこぼこした道はくねくね。暗ぐらと広がった黒雲は、ぐんぐんと流れ寒々と切れ切れに続く、ぐんぐんビュウビュウと流れる暗い雲が切れるところに、ぴかぴかと稲妻が光り星が瞬くのが見える。今向かうはヒュウヒュウと吹きつける風、ぱらぱらと降りつける雨。上も下も、あちらこちら区別無く一緒くたにふりつける雨の中、涙をはらはらと下しぐしょぐしょにぬれた林中の人物。これではまるで暗ぐらとした瀟湘の水墨図のさまのよう。(佚名『貨郎旦』雑劇第三折)^{*74}

このような疊字は先の複辞に比べると長所が三点ある。(一) 音節には比較的自然的な調和が有り、複辞のような発音しづらさがない。(二) 組み立てが比較的単純で、複辞のように文法上の変化、例えば「吾が老を老う」の「老」が前は名詞で後ろは動詞という文法上の機能が異なるようなものや、また意味の変化、例えば「農農、士士(農は農たり、士は士たり)」の場合のように前後の「農」と「士」で意味内容が異なるようなものが、突然現れることはない。(三) 理解も比較的容易で、複辞のように「言葉が入り乱れている」ようで、ごちゃごちゃしたものではない。従って、それはよりいっそう多くの場所で使われ、その用法に注意するものもよりいっそう増える。しかしながら、従来の注意は多くが詩の面のみ偏っていたようである。例えば、顧炎武は以下のように述べる。

詩では疊字が最も難しい。国風の衛詩では「河水洋洋たり、北流活活たり、^{あみ}罌を施せば濺濺たり、鱣鮪発発たり、葭莢掲掲たり、庶姜孽孽たり……」と、六つの疊字を連用しているが、繰り返しても飽ることなく、奥深いが迷うことはないというべきものだ

ろう。古詩の「青青たり河畔の草、鬱鬱たり園中の柳、盈盈たり楼上の女。皎皎として窓牖に当たる。娥娥たる紅粉の粧 纖纖たる素手を出す。」では、六つの疊字を用いている。これもまた極めて自然だ。その後となると誰もこれを継承する者はいない。屈原は『九章』悲回風で、「紛容容として経なく、罔芒芒として紀なし。軋洋洋として文に従うなく、馳委移として焉にか止まらん。漂翻翻として上下し、翼遙遙としてそれ左右す。汜濇濇としてそれ前後す。(水は乱れ乱れて経緯なく ひろびろとしてしまりもない 波ははげしく押しあいあてどもなく うねりめぐって何処へいくのか ながれにただようてさがりあがり 揺れて進めば右に左にくるくるまわり 潮時の満干にまかす 炎熱ののぼるを観、雲雨の集まるを窺い 露雪の降るを悲しみ潮水の穿ちあうを聞く)^{*75}」と六つの疊字を連用した。宋玉は「九辯」で、「精気の搏搏たるに乗り、諸神の湛湛たるを驚せ、白霓の習習たるを驂し、群霊の豊豊たるを歴し、朱雀の芡芡たるを左にし、蒼龍の躍躍たるを右にし、雷師の闐闐たるを属し、飛廉の衙衙たるを通じ、輕鯨の鏘鏘たるを前にし、輜乗の従従たるを後ろにし、雲旗の委蛇たるを載せ、屯騎の容容たるを扈わせる(日月陰陽の精気にのり、多くの神々深遠な場所に向かう 白々とした虹を駕して高く舞い上がり 各種各様の神官を訪れる 左には朱雀の星座が羽ばたくように広がり、右には蒼龍の星座がうねるように続く 堂々たる雷師は後ろに従い、風神が露払いをする 前では寝台車の鈴がチリンチリンとなり、後には貨車の列が続く 車上には雲霓の旗がばたばたとなびき、多くの騎馬隊が前後にひかえる……)^{*76}」と十一の疊字を連用している。後世の辞賦でも、ここまで出来る者はほとんどいない。(『日知録』二十一)

古詩で疊字を連用していることを口を極めて称賛し、「後世の辞賦でも、ここまで出来る者はほとんどいない」とまで考えている。また王筠は『詩経』の疊字を類別して集め『毛詩重言』を著した。その理由は詩の中に疊字を使った現象が比較的集中していること、つまり所謂連用の疊字が比較的多く、目を引きやすかったからであろう。しかし、修辞現象が集中しがちなのは詩歌一般の状況で

^{*72} 後半の訳文は岩波文庫『西遊記』(四)(中野美代子訳)を参照。ただし最後の「おどろきの山のめちやくちゃ山」のところ、原文は「堂倒洞堂堂到洞、洞当倒洞当仙」で、疊字の例ともなっている。「天目山賦」からの引用という指摘があるが(劉洪強『『西遊記』中的中峰禪師『天目山賦』—兼論『西遊記』の几例本事』泰山学院学报、2013年7月)、実際の所意味は良くわからない。類似の文章が西遊記第二十回にも出て来て、訳者の小野忍氏は「原文は「当倒洞当到洞、洞当倒洞当山」。乱七八糟(めちやくちゃ)を意味するしゃれ。日本の「おどろき、桃の木山椒の木」のようなもの」と説明する(岩波文庫『西遊記』二)

^{*73} 佚名「西窓晚望」: 未詳、童謡らしい。

^{*74} 『貨郎旦』雑劇第三折: 『貨郎旦』は元曲の名。引用文はおそらくは第四折の誤り。

^{*75} 悲回風の訳文は、平凡社古典文学全集15『詩経/楚辞』を参照。

^{*76} 訳文は中国歴代名著全訳叢書楚辞全釈(貴州人民出版社1984)を参照。

ある。というのは、詩歌はとりわけ技法に注意し、ある技法に意をもちれば、その技法を極力用いようとするものだからだ。従ってその技法がそれぞれ集中して現れる現象は、決して畳字だけに見られるものではない。今、詩とは別の文章のなかの幾つかの例を以下に挙げてみよう。例えば、

劉ばあさんはコチコチ、コチコチという音をきいた。うどん粉を箕でふるうときの音とそっくりだ。はてなとあちらこちらを見まわすと、部屋の柱の一つ箱がかかっており、その下に天秤の鍾りのようなものがぶらさがっていて、それがひっきりなしに動いている。「こりゃはあ、なんのおもちゃじゃろうかいな？なんにするものじゃろうか？」と、ばあさんは首をひねって、ぼんやり考えていたとき、「チーン」と、まるで鐘か磬でも打ち鳴らすような音がしたので……

劉ばあさんがじっと息をこらし聞き耳を立てながら待っていると、遠く遠くの方からだれかの笑い声がして、ご婦人たちが二十人ばかり、さやさやと衣ずれの音をさせながら、だんだんとお部屋の中へはいって行かれる様子。と、また二、三人の婦人がそれぞれ漆塗りの大盆を両手に捧げ持って、ここへはいってきて控えた。そしてあちらこちらで「お膳の用意」と命じる声がかかると、つぎつぎに一人また一人と帰って行き、あとには料理をとりわける給仕のものが幾人か残された。それからしばらくの間、コトリとの音もしなかったが、そのあと二人のものが炕卓をかついで、こちらの部屋へ運んできて炕の上においた。その卓には皿小鉢がずらりと並び、その中には魚肉の類が満ち満ちたままで、ほん二品か三品にしか箸をつけていない様子だった。

それを見た板児、矢庭に「肉が食いたい。」といって大声でわめきだし、劉ばあさんにピシャリと一つ頬ぺたをぶたれた。とつぜん、周瑞の女房がにこにこしながらやってきて、劉ばあさんに手招きしてみせたので、劉ばあさんはこころえて、さっそく板児の手をとって炕からおりと、正房の方へむかった。周瑞の女房はまたばあさんにひそひそ耳打ちして、こちらの部屋へそろそろと近寄った。

見れば扉のそとには、彫りもののある銅の釣りに、散らし模様のはいった緋の暖簾がさがっていて、南側の窓に向かって炕が設けられ、その炕の上には緋毛氈が敷いてある。東側の板壁に沿って綴れ錦の靠背が一つ、引枕が一つ立てかけてあり、金糸の入った閃緞の大座布団が敷いてあって、そのそばには銀の痰壺がおいてある。ところで王熙鳳は、普段のように、紫貂の毛皮で裏打った昭君套をかぶり、真珠をちりばめた鉢巻きでそれをしめ、散らし模様のはいった桃色地の襖、青藍色の刻糸に灰鼠の毛皮

を裏打った披風、それに舶来の緋縮緬に銀鼠の毛皮を裏につけた裙を着け、厚化粧もあでやかに、きちんきちんと正座して、小さな銅の火箸を握って手焙の灰をかきまぜている。平児は炕ふちのところに立ち、小さな小さな漆塗りのうけ皿に小さな蓋つき茶碗をのせたのを両手に捧げもっているのだが、熙鳳はその茶を受けとるでもなく、また頭をあげようとするでもなく、なおも手焙の灰をかきまぜながら、ゆっくりゆっくりと、「どうしたの、早く通したらいいのに？……」といつつ、頭をあげて茶を受けとろうとしたとき、周瑞の女房がはや二人を案内して床のところに立っていた。そこで熙鳳はいそぎ立ちあがろうとしたが、まだ立ちあがらないうちから、すでににこやかな笑顔をつくって、挨拶の言葉をのべ、かつ、「どうしてもっと早く言ってくれなかったの？」といて周瑞の女房を叱った。劉ばあさんは、そのときまでに床のところでもういくつも叩頭して、「若奥さまには、ご機嫌よろしゅう。」と挨拶していた。熙鳳はあわてて、「周の姐さん、はやく起こしてさしあげてよ。お辞儀はこまるわ。さあどうぞお掛けになって。あたしは年が若くて、こちらのお顔もあまりぞんじあげていませんし、いったいどんな間柄になっているかもわからないから、なんとおよびしていいやら……。」周瑞の女房が「こちらが、さきほどわたくしが申しあげましたあのおばあさんでございます。」というと、熙鳳はうなずいた。劉ばあさんはすでに炕のふちに腰かけていたが、板児はそのうしろに隠れてしまって、いくら口をすっぱくして辞儀をさせようとしても、どうしても聞かない。（『紅樓夢』第六回）

劉ばあさんが初めて榮国府に入った様子を描く以上の文の中から、「コチコチ」、「遠く遠く」、「つぎつぎ」、「満ち満ち」、「にこにこ」、「きちんきちんと」、「小さな小さな」、「ゆっくりゆっくりと」等の畳字を見ることができると。また、例えば、

この数軒の川に沿った二階建ての家の窓を眺めると、みなびしゃりびしゃりとしまっているが、窓に貼られた明瓦（貝殻や雲母石をガラスの代わりに貼り付けたもの）は欠け落ち、新聞紙を貼り付けたところも、既に破れていて、風の入るままだ。他にはなにも見えない。しかし、私の想像力は彼らの部屋の中を見ることができると。胡弓の音が聞こえてくるあの部屋の中には、女の子がそこで不慣れでまた恐ろしくもある胡弓を練習しているのだ。彼女は或いはよくよく眠っていないため、眠くてたまらない、或いは指がかじかむので、自在に動かせない、或いはおしえる者が偉そうに恐ろしく逃げ出したいのかも知れず、それが彼女の胡弓の音をいっそう悪くし

て、ほとんど音階を為さない。ギイギイキイキイとした音が続けて耳に届く。私はくたびれた者のあくび、寒い者の震え、弱者のドキドキした心臓の音を聞いているようだ。私の心の中の目には、彼女のもうろうとして眠くてたまらず、寒さに耐えられず体を丸めた、びくびくしてどうしようもない顔すら見えるのだ—描ききたい画が。(葉聖陶『隔膜』冬の曉の胡弓の歌)

この小段の歌女の悲惨な生活を描く図絵の中にも、「びしゃりびしゃり」、「よくよく」、「ギイギイ」、「キイキイ」等の疊字を見ることができる。「端端正正(端正:整っている)」などの類の疊字になると、口語ではさらにいっそう多く用いる。例えば、

随便(自由にする)	随随便便
許多(多くの)	許許多多
幾何(いかほど)	幾幾何何
不少(少なくない)	不不多少(杭州方言)
写意(気持ちが良い)	写写意意(上海方言)
喫力(きつい)	喫喫力力
客気(遠慮する)	客客气气
高興(愉快である)	高高興興
大方(鷹揚である)	大大方方
転弯(方向を変える)	転転弯弯

実に多すぎて挙げきれものではない。しかし、このような疊字を利用する狙いは同じで、概ね以下の事柄、つまり(1)音声の複雑化で語感に複雑さを増す、或いは(2)音声の調和で語調に調和感を拡大する、この二種を出ることはない。この疊字は口語の中では非常によく用いられるので、現代の文芸作品の中にずいぶん多く現れるようになってきている。例えば、

ライン川はスイスのアルプス山中に源を發し、ドイツ国の東部を通過して、北海に入る、その長さは2500里である。上流、中流、下流の三つの部分にわけられる。マインツからケルンまでが「中ライン」とされ、ライン川に遊ぶ者はこのあたりを行く。自然の風景は一般に比べて頗る素晴らしいわけではないが、旧跡は大変に多い。中でもマインツからコブレンツまでの間には、兩岸の山には昔の城砦がたくさん有り、高いところ低いところ(高高低下)に、ばらばらと(錯錯落落)、あちらこちら(班班駁駁)に見える。あるものはすでに崩れ、あるものは昔のすがたをそのまま残している。(朱自清『ライン川』)

このわずかな段落の中でも、「高いところ低いところ」「ばらばらと」「あちらこちらに」などの疊字を用いている。

疊字は副詞や形容詞とは限らず、副詞化されたものや形容詞化されたものが多い。従って『文心雕龍』物色では以下のように述べる。

詩經の詩人たちは、自然の風物に感動すると、窮まることのない聯想を馳せた。彼らはよるずの風象の間に心を遊ばせ、耳目にうつる声色の中に心をひそめた。その情緒や形貌を描写するには、自然の変化につれてことばの妙を尽くし、修辭・音率を按配するのに、わが心情に合わせて工夫した。であるから「灼灼」は桃の花の色鮮やかなことを形容し、「依依」は楊柳の姿をよく言い尽くし、「杲杲」は日の出る形容、「漉漉」は雨雪のふるありさま、「啾啾」は黄鳥の声を、「嚶嚶」は草虫の音を模倣している。……すべて極めて少ないことばで多くの内容を総括しており、情緒や形貌も言い尽くして余りがない。千年工夫してみても、これを言い換えることは容易ではあるまい*77。

これらの疊字は文言文の中では単独で使用するが、口語及び現代文芸作品では埋めこんで利用することもある。口語や現代文芸作品の中では、それぞれ一組の疊字を一字の副詞や形容詞の後ろに埋めこんで、複雑な副詞や形容詞を構成するのである。例えば「乱紛紛」「冷清清」「寒森森」「羞答答」等がそうだ。これらの疊字は、本来関連する一字を重ね、そこに意味があるように見えるもの、例えば「乱紛紛(ごたごたと乱れる)」「紛紛(乱れたさま)」、「冷清清(ひっそりして静寂な)」「清清(ひっそりしたさま)」等のようなものは数少なく、大部分が単に音感のみを借りてきてその雰囲気を表現するものである。それは感覚を模した擬態語なのであって、実際その音は使われるだけでそこになにか意味があるわけではない。したがって、「黒い」ことを「黒臧臧」と言ったり、或いは「黒魑魑」と言ったり、また時には「黒突突」「黒漆漆」と言ったりもするし、「喜ぶ」ことを「喜孜孜」と言いながら、「苦しい」ことを「苦孜孜」とも言ったり、「白い」ことを「白澄澄」と言いながら、「黄い」ことも「黄澄澄」と言うのである。多くの場合、その時の感じ方で用いるので、必ずしも固定してはいない。(本書第五篇論摹狀辭参照)

また疊字に以上のような埋め込み用法があるが、複辭にも時には嵌め込み用法がある。例えば、

居止次城邑	居は城邑に次るを止め
逍遙自閑止。	逍遙として自ら閑止なり
坐止高蔭下	坐するは止に高蔭の下のみ
歩止華門里。	歩むは止だ華門の裏のみ
好味止園葵	好き味は止だ園葵のみ
大飲止稚子。	大いなる飲びは止だ稚子のみ

*77 訳文は平凡社中国古典文学大系54『文学芸術論集』所収「文心雕龍」(目加田誠訳)を参照。以下同じ。

平生不止酒 平生 酒を止めず
 止酒情無喜。 酒を止めなば情に喜びなし
 暮止不安寝 暮に止むれば安らかに寝ねられず
 晨止不能起。 晨に止むれば起つ能わず
 日日欲止之 日日之を止めんと欲するも
 營衛止不理。 營衛 止まりて理まらず
 徒知止不樂 徒だ知る止むることの樂しからざるを
 未信止利己。 未だ信ぜず 止ることの己に利あるを
 始覚止為善 始めて止ることの善たるを覺り
 今朝真止矣。 今朝 真に止めたり矣
 從此一止去 此れより一たび止め去って
 將止扶桑淚。 將に扶桑の淚に止まらんとす
 清顔止宿容 清顔 宿容を止む
 奚止千万祀。 奚ぞ止に千万祀のみならんや
 (陶潜「止酒」詩)*78

感春情来来往往蜂媒 わき上がる春の心情は行き来して飛びまわる蜂にうながされ
 動春意哀哀怨怨杜宇。 春の思いがわき上がるのはホトトギスの寂しい寂しい声のせい
 乱春心嬌嬌怯怯鶯雛。 春の心に乱されるのはかわいいかわいい鶯の雛のよう
 春光怎如。 春の光景は何にたとえられましょう
 緑窓猶唱留春住。 緑の繁る窓の下で唱って春を留めましょう
 怎肯把春負。 どうして春に背を向けられましょう
 長要春風醉後舞。 春風ばかりをずっと願って酔った後に舞いましょう
 春夢似華胥。 春の夢は華胥の国のような素敵なお世界
 (馬致遠「惜春曲」)

それぞれの句ごとに一つの「止」の字が嵌め込まれている。しかし、このような何度も嵌め込むやり方は、埋めこむ鑲字や重ねる疊字の用法に比べて自然さは大いに劣る。この詩を評価して、「陶淵明は止の字の使い方をよく分かっている。それは自分の好むところにすぐれるようなもので、お手のものというところだろう」と述べる人もいるが、実のところ陶淵明が「暮止不安寝 晨止不能起」というときには遊戯に他ならない。

埋め込みを重ねる方法や嵌め込みを繰り返す方法は一緒に用いることができ、うまく用いると、とても落ち着いて自然なものになる。以下は埋め込みを重ねる方法と嵌め込みを繰り返す方法を一緒に用いる例である。

齊臻臻珠圍翠繞 端正に端正にと 衣装を整えて臨む
 冷清清緑暗紅疏。 さみしいさみしい 葉の緑が深まり花の紅が色あせる季節
 但合眼夢里尋春去。 目を閉じて夢の中に春を訪ねて行けるばかり
 春光堪画 春の光景が画に描けましょうや
 春景難図。 春の情景は描けるものではありません
 春心狂蕩 春の心は狂おしく
 春夢何如。 春の夢はどんなもの
 消春愁不曾兩葉眉舒。 春の愁を消そうとして眉は擧めたまま
 嬌春嬌一点心酥。 春の浮き立つ心に心はいささかくたびれもよう

付録

現代における析字などの「言葉を利用した修辭法」五種の研究の進展について

霍四通*79

『修辭学發凡』第七篇では11種類の所謂“語句上”の辭格（修辭法）について主に語られている。前半の5種はそれぞれ一析字、二藏詞、三飛白、四鑲嵌、五複疊である。

『發凡』の後書きによれば、「語句上の辭格」とは、「語句や単語をその要素とする修辭すべてを指す」ものである（第250頁）。確かに、この5種の辭格は語句の使用方法和関係するもので、語句の形態・音の響き・意義など多方面の要素に及ぶものである。これらの辭格は漢字の特徴と密接に関わるので、漢語の重要な修辭的特徴を構成する。

析字について

『修辭学發凡』では析字に対する検討が非常に念入りで、すべての辭格の中で最も長文の説明になっている。『發凡』では、形・音・義に基づき9種の方式に分けている。しかし、この9種の中で、類似音を使った諧音析字と意味の拡大解釈を使った衍義析字に含まれる6種は現在ではしばしば独立した辭格として分類され検討されるので、今日「析字」と言えば、通常は漢字の構成要素

*78 訓読文は岩波文庫『陶淵明全集』（松枝茂夫/和田武司）を参照。

*79 復旦大学中文系準教授

を分解してつくる変化形析字を指す。

譚永祥『修辞精品六十格』では漢字構成要素の分解的に絞りを、析字の離合方式を以下の4種に分けた。有離有合(例「山石岩前古木枯」、ここでは離れている山と石が合わせられて岩が、古と木が合わせられて枯の文字が作られている)、只離不合(例「米寿」、これは米の字を八、十、八の三要素に分けるだけで理解させるもの)、離即是合(例「立早」、で章の字を導くもの)、離合敷演(文字を分析して解釈し意味を考えるもの)である。

李宇明の「析字構詞 隠語構詞法研究の一」では、析字の語句構成中の作用を検討して析字が「語句上」の辞格であって、決して文字遊びの一種ではないことを強調している。文中では析字を使った語句の構成は隠語の中で常用されがちなので、その方法も多様であると指摘がある。主には以下の8種類である。(一)直訴、(二)蘊含、(三)指点、(四)画形、(五)意会、(六)偏取、(七)形近、(八)数頭。(李宇明、2002:16)

『中国修辞学史』も主に字形と関係する析字に多くの紙幅を与え、析字の発展変化の規則にかなり詳細な叙述をしている。該書では析字を識語、隠語、離合詩および予測の4種の形態に分け、これらの形態の析字の基本的な発展変化の流れを以下のように論じている。つまり、識語析字は秦漢の時代に生まれ、六朝に盛んになり、唐宋でその模倣が行われ、明清で衰えた。予測析字は後漢に萌芽し、魏晋に盛り上がり、唐宋以降の各時代に続いていった。離合析字は漢代に出現し、魏晋南北朝に模倣され、宋代に衰えた。識語、隠語、離合詩などの中には現代では既にほとんど見られないものもあるが、予測析字は相変わらず現れるときがあるという。

蔵字について

『修辞学発凡』ではここで「蔵詞」を「歇后語蔵詞(後半がない蔵詞)」(即ち歇后語)と「抛前蔵詞(前半を出さない蔵詞)」(即ち蔵頭語)の二つに分けているが、前書きの第1篇では「蔵腰」(『修辞学発凡』(上海教育出版社1976第14ページ)を上げてもいた。この「蔵腰」の部分は後になって補ったものである。張宜の『歴史の傍白—中国当代言語学インタビュー実録』の中に記録する陳光磊の説明によれば、「例えば蔵詞について。蔵詞には頭を隠す蔵頭と尾を隠す蔵尾があるのだが、彼(陳望道)は、(頭と尾があれば)更にその中間部分を隠す‘蔵腰’があるべきだと考えていた。しかしその例がみつからなかった。1975年版の中にはそれが記されている。それは私が龔自珍の詩の中の‘恨むなかれ今生去日多きことを’と言う一句を読み、まるで曹操の‘去日苦多し’の‘苦’の字が隠されているように見えることを発見したとき、陳望道が‘去日多し’は‘苦’の字を隠してい

るものだと声を上げてその例に加えたものだった」というものである(2012:305-306)。

『修辞学発凡』では歇后語について論述する時、「新興の歇后語」を挙げている。つまり「前後二句」でできていて、「前句」が譬えによる問いかけで、「後句」がその答となっているもので、口語ではしばしば「比喩を利用する」というものである。もし、その半分を言うだけならば、それは当然修辞上の蔵詞用法、つまり常用の歇后語となっている後半のない用法となる。「新興の歇后語」は当代の語彙学研究の中で注目されており、近年これを編纂して出版された辞典や、専論の研究論文は非常に多い。例えば譚永祥の『歇后語』(1986)では、歇后語の来源や、分類、特徴、芸術性及びその作成の材料や運用及び規範化の問題に研究を加え、比喩、蔵詞、諺語、成語、謎々及び民歌における双関語との区分の仕方に定義を述べている。温端政の『歇后語』(1985, 2000)では「歇后語」の名称と性質、来源、構造、語義、語法効能、修辞作用及び規範化問題を体系的に説明し、「歇后語の内部構造と語義の分析に最も細やかで深い著作である」と称賛されている(邵敬敏、方経民1991:215)。

蔵詞を理解するための基礎にあるものはなにか。黄星(2012)の考えでは、ゲシュタルト心理学を直接の心理基礎とするもので、人間の事物間の接続関係に対する認識能力と接続する事物を自由に再構成する能力だという。ゲシュタルト(Gestalt)の語の意味は「全体」或いは「完成体」と言う意味である。ゲシュタルト心理学の核心は、我々が知覚するとき、全体は部分の和より大きくなっているという所にある。実験では、我々の大脳が事物を認知するときには、近接性、相似性、連続性、連通性及び閉鎖性などの規則に従い、基本的な感覚情報を順序立て、それによって全体の姿あるいは完成形を作り上げることが証明されている。例えば、知覚するときには、切れ切れの曲線を結びつけてとらえるものだし、欠けた部分のある図形は補って捉えようとするものだ。詩歌の第一句が「床前、明月の光り」と聞けば、心の中では次に来る一句「疑うらくは是れ地上の霜かと」を加えてしまうだろう。場合によっては、無意識にこの詩をすべて朗唱してしまうかも知れない。蔵詞とはこのような認識の規則を利用した技巧である事がわかる。

飛白について

「明らかに間違いであるとわかっていながらわざとそれをまねる」それが「飛白」である。この手法は当代の漢語の中に爆発的な増加現象が現れ、漢語とりわけインターネット上の漢語の重要な特色となっている。

インターネット時代では、ほとんど誰もがその上で自由に言論を発表できる。一方漢語の方言やその土地の言葉は頗る多いので、これらの方言の発音特徴がしばしば

インターネット言語の中に現れてくる。方言の影響で「偶还稀饭（我喜欢：私は好きだ）」「这只小狗粉可爱呀，偶还木油见过捏（这只小狗很可爱呀，我还没有见过哩：この子犬はかわいいね、初めて見るよ）」「表酱紫嘛（不要这样嘛：そんなことをしてはいけない）」などのような規範に沿わない、標準を外れた言い方がインターネットで次第に流行し始めている。これらの言い方は、方言の中にf音とh音、n音とl音を区分せず、また促音の入声音を残している特徴をもつものがあることと関係しているのだが、明らかにその間違いを知らながらその模倣をしているのである。

もう一つは、多くの人々がピンインローマ字入力法を使っていることによる。つまり正確なピンインローマ字を入力しても、同音の漢字が大変多く、入力者が入力スピードを落とすまいとして、漢字の選択にまで気を回そうとせず、しばしば誤りと知りつつ変換で初めに出てくる漢字あるいは初めの方に出てくる漢字を選んでしまう、その後皆がこの「当て字」が思いがけない効果を生むのを発見して、そのまねをして使い出すのである。例えば、早期のインターネット利用者が「banzhu」と入力して「版主（ボードマネージャー）」を打ち込もうとしたとき、でてきた選択単語は当時おそらく「斑竹」だけだったろう、めんどくさかったので、その人はそのまま「斑竹」と入力したのだが、なんと「斑竹」の語が次第に受け入れられて使われていったのである。その後いっそう多くの自嘲式の「版猪」「笨猪」「半猪」などの名称があらわれてきたが、これらも多くは飛白の手法と関係する（倪素平 丁素紅、2014：210）

漢語修辞学ではインターネットの言語中の飛白現象によく注意を向けていて、重要な研究成果には連曉霞（2006）「从修辞手法蕴涵的价值取向看网络词语的规范」と張魯昌（2005）「网络语言中另类飞白的语用分析」等がある。

『修辞学発凡』では蔵詞と複疊を例として「修辞現象にはやはり廢りがしばしばある」（第246頁）ことを説く。実は、同様に「語句上の辞格」である飛白の方は現代のインターネット言語の中で大量に復活しており、この主張を十分に説明するものである。

鑲嵌について

鑲嵌の辞格は文体中でも詩体の演変と不可分である。多くの詩体は、ひとまとまりの特定の性質を持った文字を嵌め込むために、古人はしばしば特別な文体と見ていた。例えば明代の徐師曾の『文体明弁』では「数名」という詩体を示している。つまり数字を順番に一句の始めに置いて行く詩体である。南朝の劉宋鮑照が初めに「数

名詩」を作っている。

一身仕关西，家族满山东

一人中央に仕え、多くの親族を山東に広がらせる

二年从车驾，斋祭甘泉宫。

二年めには天子に従い、甘泉宮で神を齋き祭った

三朝国庆毕，休沐还旧邦

三が日で朝廷正月の仕事を終え、休暇を得て故郷に帰る

四牡曜长路，轻盖若飞鸿。

四頭の馬は輝き、車蓋は鴻が飛ぶよう

五侯相饯送，高会集新丰

五侯が見送り盛んな宴を催し、新豊の地に集まる

六乐陈广坐，组帐扬春风。

六代の雅楽は広いむしろに並び、幕が春風にはためく

七盘起长袖，庭下列歌钟

七盤の舞は長袖の姫から始まり、庭には楽器が連なる

八珍盈雕俎，绮肴纷错重。

八珍の美味は飾り机に満ち、各様の料理が重なる

九族共瞻迟，宾友仰微容

九族の身内もずっと仰ぎみ、客分たちも立派な姿を仰ぐ

十载学无就，善宦一朝通。

十年学んでもさっぱりだが、巧みな職探して一朝で出世^{*80}

（逯钦立辑『先秦魏晋南北朝诗』1300頁）

後に「数名体」は詞や曲にまで発展し、数字の位置も句首に限られず、鑲嵌の意味はいっそう強くなった（霍四通2009）。例えば明代の湯顯祖の「牡丹亭」の二首がそれである。

[小措大]（旦把酒介）女性役酒を取り上げる仕草

喜的一宵恩爱，被功名二字惊开。

嬉しき一夜の契りも 功名の二字におどろかされぬ
好开怀这御酒三杯，放著四婢娟人月在。

好し胸を開く三杯の酒 四人の美女を放り出したまま
立朝马五更门外，听六街里喧传人气概。

五更門外に朝馬を立て 六街に噂高らしめん

七步才，蹬上了寒宫八宝台。

曹植が七歩の才もて 月の宮の八宝台にのぼり

沈醉了九重春色，便看花十里归来。

九重の春色に酔いしれ 十里の道花を見つつ帰らん

[前腔]（生）男性役

十年窗下，遇梅花冻九才开。

十年読書の日々 いてつける九凍のあと梅の花は
じめてほころび

夫贵妻荣八字安排。

夫婦の富貴八字に開く

敢你七香车稳情载，六宫宣有你朝拜。

君は必ず七香車乗り 六宮詔もて朝拝し

*80 訳注：訳文は『全釈漢文大系二九 文選四』（集英社）を参考。

五花浩封你非分外。

五花官誥もて封ぜらるるも 分の外にはあらず
論四徳、似你那三从結願諧。

四徳を論ぜば、三従の願い叶わん

二指大泥金報喜。

二指の金泥土紙の及第通知

打一輪皂盖飞来。

官員が急ぎ一両の車を飛ばして迎えに来よう

(第三十九出『如杭』^{*81})

数字の他に、更にその他の文字類型を鑲嵌する詩体も多い。『中国修辞史』(中巻)では南北朝だけで二十種類に近い鑲嵌詩が出現しているという。各種の名前を鑲嵌するものに、姓名詩、地名詩、宮殿名詩、車舟名詩、草木名詩、鳥獸名詩、薬名詩、卦名詩、歌曲名詩、針穴名詩、龜兆名詩、建除詩などである。各種の数を鑲嵌するものは、数名詩以外に、更に四氣詩、四色詩、十二属性詩、八音詩、六甲詩などがある。極めつけは、複辞類を鑲嵌する嵌複詩である(宗廷虎、陳光磊主編2007:1450)。

複疊について

複疊には複辞と疊字^{*82}が含まれる。複辞は文言文の修辞現象というべきで、現代漢語の中ではあまり見かけない。たまたま詩歌や戯曲など特定の文体の中に現れるくらいである(楊春霖、劉帆主編1995:607)。一方疊字は現代漢語の中でも相変わらずかなり一般的に使われている。現在通常複疊といえ、疊字をさして言う場合が多い。

疊字は漢語の語音を使った修辞の中では最も表現力に富み、また最もよく見られる修辞手段であって、日常の口語コミュニケーションおよび各種文章ジャンルでの使用も極めて広い範囲にわたる。例えば董季棠は『修辞析論』で、「複疊の好いところは、論説に用いれば、文章に勢いが出るし、抒情に用いれば、情感の味わいも残り、雰囲気もつたわる。声を出して読めば、言葉が尽きても気持ちは無限にひろがるようである」と言う。それに対応して、疊字語の各種各様の豊かさも漢語の重要な特徴の一つとなっている。『中国修辞学史』(上巻代第一編「語音修辞学史」、陳光磊著)には古今漢語の複疊形式の運用に対して歴史的な考察がかなり詳しくなされている。

当代では、疊字現象は漢語修辞学と語法研究から共通する興味を引き起こし、語法と修辞が結びつけられるかという研究の重要な案件となっている。王力『中国現代

語法』第36節で論じている「擬声法」と「繪景法」の二種類が「疊字」を使ったものである。「単に修辞学の中の話のようだが、実は語法とも関係がある」、なぜならば「特殊な言語形式によって表現する必要があるものであり、特殊な言語形式は語法の領域に属するものだからである」(王力1985、張煉強1996)。郭紹虞先生も、「馬致遠『漢宮秋』中の三重の例(‘他他他伤心辞故主，我我我携手上河梁’)は、詰まるところ語法の問題なのか、それとも修辞の問題なのか。それほど簡単に答えが出せはしないものだ、だとすれば、語法が修辞に結びついた問題となるのではないか」、「‘合わさって二つの美’という、この二つをはっきり分けすぎる必要はあるまい。逆にその実用的な意義が失われてしまう。」といている(郭紹虞、1979:437)。

呂叔湘(1980)『現代漢語八百詞』では「形容詞生動形式」の名目で漢語の形容詞の重疊形式に表を使った全面的な検討を行っている。形容詞以外にも、現代の語法学者は漢語の動詞、名詞、副詞、量詞などの重疊形式に対して突っ込んだ研究を進め、重疊形式の語法の機能と語法意義を示している。これは修辞学が疊字に対する認識を深化させるための援助を果たすことを示すものである^{*83}。

参考文献：

- 陳望道『修辞学发凡』，上海教育出版社，1997年新2版。
董季棠『修辞析論』，台北：文史哲出版社，1992年。
郭紹虞『汉语语法修辞新探』，商务印书馆1979年版。
黄星『藏词研究的认知语用学新进阶』，『求索』2012年第6期。
霍四通『汉语“嵌数体”的流变』，『岡山大学文学部纪要』第52号，2009年。
李宇明『语法研究录』，商务印书馆，2002年。
连晓霞『从修辞手法蕴含的价值取向看网络词语的规范』，載王德春、李月松主編『修辞学论文集』第十集，上海外语教育出版社，2006年。
呂叔湘主編『現代漢語八百詞』，商务印书馆，1980年。
邵敬敏、方经民『中国理论语言学史』，东师范大学出版社，1991年。
素平、丁素红『現代漢語实用修辞学』，南开大学出版社，2014年。
譚永祥『歇后语』，山东教育出版社，1984年。
譚永祥『修辞精品六十格』，山西人民出版社，1993年。
王力『中国現代语法』，商务印书馆，1985年。
温端政『歇后语』，商务印书馆，1985，2000。

^{*81} 訳注：訳文は、平凡社古典文学大系53『戯曲集』(下)を参照。

^{*82} 訳注：原文は「疊音」とあるが、韻を重ねる疊韻との誤解を避け、また『修辞学发凡』にあわせて疊字と訳した。

^{*83} この研究は中国教育部人文社会科学研究規画基金項目“‘修辞学视角的汉语违实表达研究’”(批准号：16YJA740015)を援助を受けたものである。

杨春霖、刘帆主编『汉语修辞艺术大辞典』，陕西人民出版社，1995年。

张炼强『汉语语法修辞结合问题』，载林文金、周元景编『语法修辞结合问题』，北京语言学院出版社，1996年。

张鲁昌『网络语言中另类飞白的语用分析』，『广西社会科学』2005年第3期。

张宜『历史的旁白—中国当代语言学家口述访谈实录』，高等教育出版社，2012年。

宗廷虎、陈光磊主编『中国修辞史』（三卷本），吉林教育出版社，2007年。